

婦の縁を結び給へきりしたんの教にも夫婦の道は嫌はざることなりとありければ\*じよさはつ勿論夫婦の道はよき事なれどもわが如く一<sup>せ</sup>世不<sup>な</sup>犯<sup>ら</sup>の願を立てたる者は叶はずと宣へば姫君さらば後には何ともあれこの夜一夜のちぎりをばこめ給へあにまを扶け給ふ爲なればこれつらの道はわづかの事なりと勧められければ天狗いよく御心を興すに依て餘りに詮方なく思召しおらしよ申し給ふ折節まどろみ入り給ふ御夢にいづくとも知らぬ所にゆき給へば言葉も及ばぬ靈地あり。世に類ひなき色々の花は草木に咲亂れ妙なる匂四方に薫じ梢にやすむ數々の鳥の囀る聲はたゞ糸竹の管絃に異らず美々しく立てる殿閣に歩み行き内をはるかに見渡せば金銀名石を磨きたて珠玉を連ねて飾りければ輝き渡るそのうちのやすみふしども玉のゆかに言葉も及ばぬ美々しきしとね枕をしき重ね座敷の上の莊嚴はなほ勝

れたる装ひと見へあんじよべやとのましますとて音楽聞へ異香薫じ。樂しみ盡させぬ所なり。餘りの貴とさ面白さに止りたきと望めどもこゝはべやとの栖家にて凡人は假にも來る事なし。たゞ誠の道に願ひ深く辛勞の行體功力を重ね身を接したる人のみ來りて住み給へる所なりと言交し給へばあんな夢さめたり。驚き給ひてあたりを御覽ずればあんなそばに渡らせ給ふ姫君を始めとして數々の宮女達綾羅錦繡の色をそろへて並居られけるを先に見給ひしには引換へてさも見苦しくけがらはしきもの哉と思召し大きに嫌ひいやしめ給ふ也。されば魔法に意見を申せし\*ておだすが言葉を帝信じ給ひて姫君を添へおき給へば\*じよさはつの御談義にてかのおん方もきりしたんになり給ひて一命を果し給ふ也

されば父王これらの事を御覽じてはつたと御眼精弱り給ひ御分國



をニツに分けて先一方を\*じよさはつにゆづり給ふ也。\*じよさはつ同じくは世を捨て山中のおん住居こそ深きおん望みなれどもしはしはおん國にマヤの御教を弘めんと思召すを以てまづおん國を受取給ひあまたのゑけれじあを御建立あつてくるすをたて上下萬民をおしなべてきりしたんになし給ひ皆ひいですの道に引入れ給ふ也。されば後には御父も度々の御教化積れるを以て終にはきりしたんになり給ひければ残る半分のおん國をも\*じよさはつに譲り給ひて御身は山中にひき入り過ぎし科のべにてんしやとして善事善行を勵しとどけ給ふ也。\*じよさはつはおん國を\*ばらきあすと申す大臣へあづけ給ひ山居へ逃入り給はんとし給へども大臣達惜み奉りて支へんさるゝ也

或時でぜるとへ一人わけ入り給ふにこつじ乞食一人を見つけ給ひ彼が着

たるつゞりを御装束に換へ給ひその褌ふんどしを御身にまとひいづくともなくたどり行き給ふ。天狗そのおん前に出現して企て給ふおん望みを妨げ奉らんと種々障礙を爲すといへども\*じよさはつは御主我を守護し給へば恐るべき事なしとて二年の間かくの如くの難儀をこらへ給ひ\*ばるらあんを訪ね給へども見あひ給はず二年過ぎて\*ばるらあん居給ふ岩窟へ行きその口に立ちいかにはあてれ我にまじ要文を唱へ給へと呼はり給へば\*ばるらあんの御聲を聞き給ひて出向ひ互に懐付き御顔を吸ひ歡喜の御涙にむせばせ給ふ也。じよさはつ御國にての事をくはしく語り給ひ共にまじ尊み給ひて御一緒に年月をおくり給ふ也。\*ばるらあんは御出世より三百八十年に當てこの世を去り給ひおんあにまをまじ拵へ捧げ給ふ。\*じよさはつは二十五のおん年におん國を捨て給ひ三十五年山居を届け給ひて終に無事におんあに



まをおさめ給ふ。御代を受取り給ふ\*ばらきあす\*じよさはつの崩御と承りつけられ。數輩のおん伴を引具してかのおん死骸と\*ばるらあんのおん死骸をも取奉り御住國の都に並びなきうやまひを以て納め奉り給ふ也。その御死骸より現し給ふ\*ん奇特限りなしと也

#### 第四 ゑうすたきよの御作業

去程にとらやのと申す帝王の御代にぶらしいと申す將軍あり。武邊にとつても世に超へ人に勝れて並ぶ方なし。この人大將として向はるゝほどの虎口には敵更にたまらず。戦の度毎に究竟の敵數輩を打取られずといふ事なし。これに依て手強い朝敵をたやすく亡し諸國の悪黨を誅伐して無事太平の御代を治められし事たゞこの御仁體一人の忠功なり

同じく御簾中も亦女體なれどもおん智恵たけて萬づに正しきおん身持至れる賢女に在ます。御子を二人持給ひけるが大人なれどもわが乳房を以て手づから抱き育て給ふ也

されば\*ぶらしいと弓矢をとるには。健き武士諸人の恐るゝ精兵な



れども又内心はいかにも慈悲柔軟にして殊更貧なる輩をはごくみ萬事について他を憐れむ志深きが故に、深深く御賞覽なされまことの道に引き入れ光を與へ給ふ也。ある時狩へ出給ふ所に鹿一群山を分け出で、走り行く。そのうちにすぐれてふときをじか一つありしを目懸けて早馬を以て追付け給へばその鹿いかにも聳えたる高みに昇り逃去らずして立向ひたるを見給へば二つの鹿の真中にくるすにかゝり給ふ。鹿のおん姿の輝き給ふを見て大きに驚き敬ひの心起て馬よりこぼれ落ちらるる。然れば其時、鹿かの鹿の口を以ていかに\*ぶらしいど何とて我を追つむるぞ汝しひしんを以て我を崇めける故にこの鹿を狩取らんと思ふ如くこの鹿を以て汝を狩取るべき爲に天下るなりと宣ふ。其時\*ぶらしいどさても御身は誰にて在ますぞなほ明かに知らせ給へと申上げらるる。鹿宜く我はこれ天地を作り萬

物をあさめ人間を扶くる爲にくるすに懸りし、鹿也と宣へばさて扶かる爲には何と致すべきぞと尋ね申さるゝに、鹿扶かりたく思ふにをひてはばうちいずもを授かるべし。汝が妻にもこの由を知らせ同じくひいですにうけさせよ。明日この所へ來れこの後あるべき事を告知らすべしとの示現也

\*ぶらしいど御言葉のまゝに妻にかくと語られ則夜半程に夫婦二人ともに御子を召連れ家來のものどもにも知らせずその在所の\*じよあんと申すびすばの御方へ參られ右の仔細を委く語り給へば皆々にばうちいずもを授け給ふ也。先\*ぶらしいどの御名を\*ゑうすたきよと付給ひ御妻は\*てあひすた一人の御子は\*あがびと今一人は\*てあひすたと付給ふ也。その翌日早天に御狩に事よせて馬上の御供纒にてかの山へ入り給ふ。その御供の衆をば鹿垣の爲にとこゝかし



ここにまぐばりておき給ひたゞ御自身昨日尊體を見奉られける所へ参り給へば再びモモロヒ現はれ給ひばうちいずもを授かり申されける事を御感なされこの以後古への\*じよぶといへる聖人の如く世界にをひて堪忍の鏡と爲すべきために様々の難儀折角を以て其身を試み給ふべしと告知らせ給ひ來るべき苦痛逼迫をつぶさに仰せ含められて強き心を以て確かにこらへ届くべしとおん諫めなされお力をそへ給ふ也。\*ゑうすたきよは地上にひれふしておん禮を申上られいかなる難き事なりとも計らひ與へ給へと身を捧げ奉りその上にては御力をそへ給へと深く頼み申さるゝと共にモモロヒ現はれ給はず\*ゑうすたきよおん館へ歸り給ひてかの由かくとおん妻へ委しく語り給ふ也  
去程に日數を経ずして御家内に不思議の病ひおこり從類眷屬のこらず死す。又程なくして財寶と用ゆる數千匹の羊其外數多の牛馬之

とくく種を絶つて死し果る。其時\*ゑうすたきよその家の難病を免れん爲に。おん妻と二人の御子を召連れ山中へ退き給へばおん館へは盜賊打入つて恣ひまゝに金銀珠玉を始めとしてあらゆる財寶をこたくく取盡せば\*ゑうすたきよ重ねては故郷へ歸り住み給ふべき御便もなく又人々に面をむけ給ふべき様もなくしてゑじつとといへる遠國の知人因み一人もなき所へ無縁の旅人となつて流浪し給ひ難艱の光陰をおくり給はんと思召し定め給ふ也

去ればある港へ出で給ひおん舟に召してはるか波濤を凌ぎ給ふところ船中に在ます御臺は比類なき美人にて渡らせ給ふことをかの船頭見まいらせて静心なくあこがれいかにもしてこの御方を奪ひとり申さんと隙なく思ひたくむ也。さてその國につき給ひおん舟より上り給はんとし給ふに船賃に渡さるべきもの少しもなければ事を損



によせて御簾中を奪ひ取る也。一應わび給へどもいかでか同心いたすべき。却て御身をも海に沈め申さんといたす體なれば力に及び給はずして御兩人の御子と共にためしなきおん悲しみの堪えがたきおん涙を抑へ詮方なくて御夫婦別れ給ふ。拵のおん計ひを以て御簾中は終に御身を汚し給ふ事もなし。それより\*ゑうすたきよは二人の御子とともにいと弱りて行給ふ。されば其途に渡り給はで叶はぬ大河あり。御二人の御子いとけなく在ませば先なほ幼き御弟一人を肩にかけ給ひて向ひにつき給へばおろしおきて今御一人を渡し給はんとて河の半ばを渡り給ふ所にさきに渡し給ふおん子きびしく泣きいで。切りに叫び悲しまるゝ聲次第に遠ざかるを顧み給へば狼來りさしくはへて走り去る。こはいかにさても無残なり口惜しき事かなともだえ給へどもはや何處へか行きつらん。御力に及ばずして御後

に残り給ふ今一人の御方へ行給へば御父の渡りつき給はぬ間にそれをも又獅子王來つておつとりゆき先も見へずおはへて行き給はん事も更に叶はざれば詮方なくてあきれ給ひしが余りの御悲みに御心亂れその河にて自害し給はんとのでんたさん切りに競ひ來りとやせんかくやせんと御内心もだへこがれ給ふ所に拵おん力をそへ給へばそのがらさを深く感じ給ひて難儀悲しみをば却て喜びとなしてはたと強き堪忍のおん心いでき御恩の御禮を申上げ給ふ也

然ればさきの狼の取りて行きたる御子をばその途田畠なれば小作人出合ひて追落して見れば只人とは見へず勝れていつくしき御姿なればその在所の人深くいたはり育てつる也。又御一人獅子王のとりて行きけるをばばすとる數多むたる所なれば道具を取合せきびしく追つむるを以てすてゝゆく。いづれも御衣裳をくはへて打かたげた



る計りなれば、少しも御身に傷をばつけ申さず、こゝ又世の常の人にあらずと皆々申し合ひ、いかにもいつきかしづきて育て申す。されどもおん父はこれらの事をば知り給はず、恩愛の別れの御悲み、一方ならぬ御歎き、夜晝肝に銘じ給ふ。されば恨めしきは浮世の習ひ也。此身を育つる爲、日々の營みを歎かて叶はぬ習ひなるに、この御仁體は流浪の御一人身なれば、いかんともし給ふべきやうなくして、終に人の奴となり給ひ、十五年を限つてその間は樹木を育つるその役を受取つて勉め給ふ也。二人の御子の在ます所は程近けれども、互ひに少しも知給はずして年月を送り給ふ。又御簾中のおん上に、新たなる奇特あり。その身は人に奪はれ給ひて、しかもおん姿、比類なき美人にておはしけるが、計の御計ひなれば、あんどよ守護し給ふを以て、いづくに何時までおはしますとも、いかでか御身に一微塵ほどのおんけがれをも受給ふべ

きや。これに依て御夫に別れ給へば、たちまちかの船頭にはかに深き謹みいでき、大きに恐れおのゝき奉る

されば、ろうまの大王より御進退の數多の御分國近年かつて治らざ、逆臣いやましにして分國亂れ、從ひ申す國これなき體になりゆきければ、大王の御歎きには、さても過にし方\*ぶらしいどわが臣下にてありつる時代には、たやすく惡黨を亡して朝家治まり、諸國靜謐にして民豊かにありつる事を、今更かつて忘却せず。いかにもしてこの\*ぶらしいどに尋ねあひたき望み千萬なり。朝家再興の爲に\*ぶらしいどを求め出したらん輩には、重き恩賞を與へ玉ふべき由仰せ出さるゝ也。然れば勅諭といひ、又は國家の治手、萬民の扶手となり給ふべき御仁體なれば、方々へ手分をして海陸ともに遠きをいはず、山の奥谷の底浦々里々をこまやかに尋ね申す也。しかればこの\*ぶらしいどの武士



にて渡らせ給ひし時召使はれたる侍二人相伴ひて尋ね申しけるが不思議の仕合せにて\*ぶらしいどの在ます所へ尋ねてまゐりしかもかの\*ぶらしいどの御宿をかりてゐければ\*ぶらしいどはその者共を見知り給ひてその古へを思ひいだし忍びくゝに御涙を流し給ふと雖も二人の旅人は未だ思ひもよらずして申しけるはこの十四五年先きよりかやうくゝの御仁體の御妻と御子を召連れて都より下り給ひしがもしこのあたりなどには在まらずやと尋ね申されければ左様の人をば更に知らずと宜ふ。かくて互ひに様々の言葉を申しかはさるゝを以て二人の旅人あやしめ申しけるはこの宿の主の聲色こそ我等が尋ね申す主人の御聲なれそれのみならず御顔形をつくくゝと見申せばもとより數年の御辛勞故衰へさせ給ふとはいへどもさすがおん面ざしおん脊のほど少しも變り給はざれば二人の武士かつうは驚きか

つうは喜びて曰く又その實否を知るべき爲にたゞし申すべき事ありとて一年虎口にて御頭に傷を受け給ふその御跡のかくれなかりしを見申しければ即ちそのおん傷を見付けて今こそ我等が主人にあひ奉りたれこれは夢か現かとも覺へず抱きつきて歡喜の涙を止めえず。その時あたりの人々この由を承りて驚きさやうの御仁體とはかつて存ぜざりし故に萬事龜相にあつかひ申したる事を深く悲しみにはかに皆々恐れを爲す

かくて御歸洛の用意をばその所は申すに及ばずそのあたりの人々より馳走いたして着し給ふべきおん裳束又皆具を飾りたる馬の同じくのりがへその路次銀と都までの御用意をも潤澤にとゝのへてその國人等我も我もと馬上のおん供數輩打連れ美々しき馳走奔走にて都も近くなりぬればこの由かくと叡聞あつて大きに喜び給ひ忝くも帝



は直に路次まで出向はせられ召連れ給ふを以て\*ぶらじいどは並びなく面目を施し喜びの參内を遂げ給ふ

去れば即ちもとの如くに諸軍勢の司に任せられければ時を移さず諸國へ觸を爲さるゝ也。それに依て國々より諸軍勢を揃へ帝都へ差のぼせらるゝその中に二人の御子も在ますなり。この二人器量骨柄人に勝れ並びなき仁體也。其時\*ぶらじいどこの人々を見給ひ誰とは知り給はざれども親しく思ひつき給ひて毎日御相伴に召使はるる。然れば諸國の軍勢何萬騎とも數を知らず。殊更一人づゝを選びすぐつて召上せられたるつはものなれば容易く惡黨を攻亡し御歸陣の時三日の間を身の御妻の在ませし所に軍兵を休め給ふ也。されば二人の人々は思ひもよらずに御母の宿を陣所と定め夜晝親しく起臥までも同じ座になし給ふについて心の底を残さず語り給ふ。これ眞實の

御兄弟なれどもその儀をば互ひに少しも知給はざる也

或時御舍兄より御舍弟に語り給ひけるはそれがし幼少の時の事を僅かに覺へけるが我父はこの大將軍の如く都よりいつも軍陣の時は總大將として諸軍勢を連れていづくへも赴き給ひし事を今思ひ出したり。そのおん父何の仔細かは知らず御母と諸共にわが弟一人ありつるに二人の子を召連れて夜の間におん舟に召しはるかなる海を渡りて他國の港につき給ひしが仔細は知らず御母君はそのまゝ船に止り給ふ。互ひに深きおん悲みにて別れ給ひおん父は二人の兄弟を召連れていづくとも知らず行き給ふ道に漲り流るゝ大河ありしに行きかゝり給ひしが二人の兄弟を一度に連れて渡り給ふ事叶はざれば先我弟を肩にかけられ早き瀬を渡りて向ひにつき給ひ河原におろしおき給ひて又わがむかひに來り給ふとて河中を渡り給ふ折節わが弟わ



つと叫び切りに悲しみの聲をあげ泣叫びしが程なく聲遠ざかる。何事ぞと見給へば狼一匹來つてさしくはへ行き方知れず失せければ御父もだへ給ふ御景色なれどもおはへて走り給ふべき事も叶ひ給はざれば詮方なくて御涙とともに我を渡し給はんと急ぎ給ふ所にさも恐ろしき獅子王來つて我をおつとり飛走つて行く。中々おん父の追付給はん事も更に叶ひ給はず。折節その所にばすとる數多獅子虎を防ぐ道具をそろへてなみぬけるが我獅子王にくはへられて泣叫ぶを見きいて獅子王をおつとりこめて攻めければ我をすて獅子王は山へ逃げさる。その所の人我を大きにいたはりて宿所に連れて歸り家内の人々にその有様を語りければ不思議に難儀を逃れけると皆人申合へり。それより今日に至るまではわがおん父母のおん行衛をも又わが弟の成果をも知らずと語り給へば御舍弟この由をつくくと聞き

給ひさては御身と我は兄弟かと存ずる也。その故は我幼少の時狼に取られしをのがしてかくの如くなりて我を養ひし人常々語られける也。今は疑ふ所もなく御身と我は兄弟なりとて互ひに抱付き喜びの涙を御兩人共に止めかね給ふ。これは不思議の仕合也。諸共に力を得たりとて先大きな喜び也

やゝあつて又互ひに語り給ふ。御身と我は兄弟の宿縁朽ずして只今まのりあひたりと互ひに語り給ふを御母つくづくと聞き給ひこれは不思議の沙汰かな。若き男子兄弟と名のり合ひ父母の由來を語るも皆我上なり。是は正しく我子ならんと思召しその翌日ろうまの大將の御前へいで給ひて御身の由來をくはしく語り給ひろうまへ我を召連れてたび給へと宣へば將軍之を聞き給ひ大きに驚かれつくくと見給へば正しく御身の御妻なり。こは如何にと驚き給ひつゝ並び



なき御喜びにて我こそ\*ぶらしいどなれ見忘れ給ふかと名のり給ひて互ひの御喜びはなのめならず。暫しは御言葉もなく涙を止めかね給ひしがやゝあつて御妻より二人の子供はいづくにあるぞと尋ね給へば御父の御心に悲しみおこつて又泣くく答へ給ふやうはさればその二人の子供の事を思へばわが悲しみたとへん方も更になし。その有様をかやうく<sup>く</sup>にありつると涙にむせびて語り給ひ我は流浪の國より召歸され前の如く皇恩を蒙る也。再び御身に會ひもしければたぐひなき喜び也。此上の不足には二人の子を失ひたる事也と深く歎き入り給ふところに御妻宣ひけるは<sup>おまへ</sup>の御計にて我等を再び會はせ給ふ如く二人の子供にも會はせ給ふべしと宣へば\*ぶらしいど其故は如何にと驚き上りて尋ね給ふところに先に聞き給ひつる二人の人々の上を語り給へばはたと喜びかの陣所へ人を遣はし召寄せ給ひ

二人にその謂れを問ひ給へば細かに語り申さるゝ也。その時\*ぶらしいど今こそ直の御子なりと知り給ひ御喜び淺からずさればその國にこもりし朝敵を亡ぼされ一方ならぬ御喜びにて御歸洛ありし也。然る所に先王ははや崩御にて<sup>たうぎん</sup>當今をば\*あどりやのと申しけるが朝敵を亡ぼされし功勞を喜び給ひて\*ぶらしいどに御褒美なのめならず御祝言の御振舞とり<sup>く</sup>にてありつる也

さればその當今はぜんちよの本尊に深き信心あるを以て朝敵亡びて諸國治まり天下太平になりけるその喜びとしてかの本尊に大法事をなして供養せられかの大伽藍に行幸あつて男女によらず尊敬しおがみうやまふべしとの勅説なり

すでにその日帝王本尊に近く参り給ひ<sup>いんざん</sup>懇懃に拜せらるゝ時\*ぶらしいどを別して賞翫せられ堂の内へ呼び給ふ所に\*ぶらしいどは其



身をはじめ二人の御子息御妻伴ひ堂の内へは思ひもよらず却つて大  
きに嫌ひその庭へいたる事をさへひんしよ至極なりとて知らず顔に  
てゐ給ふ也。その時帝王何とて\*ぶらしいど堂に入つて本尊を拜せ  
ぬやと宣へば\*ぶらしいど我等はきりしたんなる故にかくの如くな  
りとありける時惡王甚しく逆鱗あつていや／＼わがうやまふ本尊な  
れば急ぎ拜すべしと切り宣ふなり。其時\*ぶらしいどなる義にを  
ひてはたちまち一身を捧ぐべければ何かは以て勅諭を辭し奉る事あ  
るべきなれどもこの義に限つて些かも叶ひ奉らず拜むことは申すに  
及ばず本尊の方へは一足すゝむ事も致すべからずと申上らるればい  
よ／＼怒り甚しくしてその場を急ぎ立ち給ひ重罪に行ふべしとて猛  
き獅子王の牢屋のうちへ\*ぶらしいど御夫婦と二人の御息子ともに  
入れてかの獸に與へらるゝ所に獅子王はいかにも柔軟になりそのあ

たりへよりてひれふし頭をかたむけ結句足をねぶりて深く敬ふ景色  
を現はす也。帝王の瞋恚なほ勝りてそれよりなほ重き苛責を與へん  
とて赤金にて大きに作りたる牛を火の色になるほど焼立てそのうち  
へ入れよとありけれどもかの人々は帝王に少しの恨みもなきのみな  
らず大きに喜びを現はし火焰の色にやけたる赤金の大半のうちへ入  
れられいかにも心安く皆座してしんかんに拵を敬ひ奉り給ひその  
うちにて御色體を離れおんあにまばらいぞへ到り給ふ也

其時の有様尊きとも言ふべき言葉なし。四人の御死骸死人とは見  
へ給はず御顔色美はしく眠りたる人の如くにして座し給ひし也。き  
りしたん集り御死骸を見奉れば火焰の内に久しく座し給ふといへど  
も御身の毛一筋も焼け給はず御容顔さもいつくしく在ますことを見  
奉る故に信心深くなつてさても先御代にはこの善人を朝家の御寶と



宣ひて故郷となるろうまへ再び召還され爵祿は申すに及ばず世間に  
余光を顯はし萬事に身の思出を與へ給ひしが當今は引換へ給ひ大忠  
節をも思召し知られず御褒美未だ聞へざるその上にあまつさへまこ  
との道に心を磨き勝れたる人なりしを知り給はずして本尊を拜せよ  
と宣へども\*ぶらしいど四人の衆はひいでずを堅固に保ち給ふ事は  
申すに及ばずその御返事の御言葉を少しも濁らじと明かに申し離し  
給ふを以て惡王の逆鱗甚しくして恐しき苛責を様々に加へ深くあた  
をなしてかの色身を攻めはたされけると言合へり

さればこのことまことの光より見れば先御代の御懇切は世間の喜  
びにて後生の爲には必ず妨げとなるべし。今引換へてこの帝より與  
へ給ふ苛責の苦患は先皇の御恩賞よりもなほ勝りたる御大切也。そ  
の故はぜんちよの本尊を拜まざるとてこの善人達に甚しき苦しみを

與へ給ふ道より御色身を離れ給ふ故にすぐれて深き功力となり大徳  
を得給ふを以て上下萬民の願ひ望む上天のばらいぞへ今日速かに至  
り給へば終りなき命の上に量りなき喜びの冠をかうむり給ひ終りな  
き大果報に極まり給ふ也。その御死骸は御出世より百四十年目に建  
立せられしゑけれじやのありしに丁寧に納められ給ふと也



第五 こんてむつすむんぢ

御主おんぬしの御ごを  
學まなび奉たてまつる經

抄

○讀誦の人に對して草す

このこんてむつすむんぢ日域じちきにをひて、おんのこんばにやのすべりお  
うれす御發機ごはつきに依てらちんの證本せうほんより確かに翻譯げうやくし、校合度々けうがうどどに及ん  
で、深旨じんしを和けて以て梓しにちりばむ。これ拵ぢの道を行き、後生ごせうを扶かり  
たく思ふ人を躰たかず導くこと最も大切なる義なれば、當門たうもんこんばにや  
の使徒しと並びに世俗の輩をして、讀易よみやすからしめんが爲なり。然るにこの  
書のうちにをひて、徳深き事多しといへども、わきて徳を求めんと、志  
願を以て之を讀誦せん人いづれのところをなりとも開き見ば、今我いまわれ爲  
に肝要かんやうの理りを記されたりと辨わへざる事あるべからず。所詮しよせん拵ぢの計

りなき善の源にて在ますおん上よりこの賜たまひを與へ給へば、歡喜踊躍くわんぎうどくの  
心を以て、この書卷しよくわんを常に翫あそび讀みては、讀み幾度いくたびも讀返して、善の道の  
師範しはんとあふぐべきもの也

○世界の實の無き事をいやしめ御主おんぬし  
を學まなび奉たてまつること

御主おんぬしの宣のたまへ *Qui sequitur me, non ambulat in tenebris, sed habebit lumen vitae*

Ioan. 8 我を慕ふ者は暗路あんろを行かず、たゞ壽命の光を持つべしと也。心  
の暗を逃れ、まことの光を受けんと思ふにをひては、おんの御行跡ごかうせきと御  
氣質かたぎを學まなび奉れと、この御言葉ごことばを以て勸め給ふ也。然る時しかんば、おんの  
御行跡ごかうせきの患難わんなんを我等が第一の學問とすべし。おんの御教ごせうは諸々の善  
人の教に勝れ給へり。善の道に立入りたらん人は、御教ごせうにこもる不可

こんてむつすむんぢ抄



思議の甘味を覺ゆべし。然るに多くの人の御法を繁く聽聞すれども發機少きことは。の御内證に値遇し奉らぬ故也。の御言葉を味ひ深く達して分別し奉らんと思ふにをひては我身の行儀をこくとく等に等しくし奉らんと歎くべし。へりくだる心なきによつてちりんだあでの御内證を背き奉るにをひてはそのちりんだあでの高きおん理りを論じても何の益ぞ。まことに媚びたる言葉は人を善人にも正しき人にも爲さずたと善の行儀こそ人を手に親しませ奉るものなれ。こんちりさんといふ後悔の理りを知るよりもそのこんちりさんを心に覺ゆる事はなほ好ましき事也。びぶりやといふ尊き經文の文句をことくく暗んじ諸々の學匠の語を皆知りても拵の御大切とその御合力なくんばこれ皆何の益かあらん。拵御一體を大切に思ひ仕へ奉るよりほかは皆實もなき事の中の實もなき事也。この

世を厭ひて天の御國に志すこと最上の智慧なり。かくの如くある時んば過去の福德をたづね求めそれに頼みをかくる事は實もなき事也。位譽れを望み歎き身をたかぶる事も又實もなき事也。骨肉の欲するに任せ以後甚だ迷惑すべき事を望むは實もなき事也。行儀の正しからん事をば歎かずして長命を望むは實もなき事也。現在の事をのみ專として未來を覺悟せざること實もなき事也。さしも早く過去の事に愛着して長き樂みのあるところへ急がざる事實もなき事也。 Oculus non vidit, nec auris audivit, nec in cor hominis ascendit, quae preparavit Deus iis qui diligunt illum. i. Cor. 2 眼は見る事に明かず耳は聽く事を以て達せずといへる貴き經文の語を常に思出すべし。然る時んば目前の事より心を離し目に見へざるところに心を移すやうに歎くべし。その故は色身のみだりに望む事を慕ふ者はその身のこんしゑんしやを汚し。

こんてむつすむんぢ抄



押の御加護なるがらさを失ひ奉る也

○内證の閑談の事

御主の御言葉に・Regnum Dei intra vos est. Luc. 17 押の御國は汝達の内にありと宣ふ也。心より押に立歸り奉りこの墓なき世界を厭ふべし。然らば汝のあにま寛ぎを得べし。外なる事を捨て内なる事を専らとする道を習ふにをひては押の御國來り給ふを見べし。その故は押の御國は無事とすびりつさんとよりの喜びなり。是を罪人には與へられず。汝のうちには相應の御居所をととのゆるにをひては汝に來り給ひ御身の喜びを覺えさせ給ふべし。御主の御威光とあんにつくしさは内證にありまたそこにをひて御感應をなし給ふ也。内證を専らとする輩を常に音信し給ひ睦しくともに語り給ひ感にたへたる喜び

を抱かせ給ひ深甚なる無事と有難き御懇切を彼に盡し給ふ也。さても二心なきあにまこの御主汝に來り給ひてともに居住し給ふ様に心中を調へよ。その御言葉に Si quis diligit me, sermonem meum servabit ; et Pater meus diligit eum, et ad eum veniemus, et mansionem apud eum faciemus. Ioan. 4 我を思ふ者は我言葉を保つべし。又わが御親もその人を思ひ給ひ又御親と共に彼に至り居住すべしと也。

かるが故にの御ためには心中に道をあけ余にはことごとく門を閉ぢよ。を持ち奉るにをひては裕富の身となり足んぬすべし。萬事について汝を貢ぎ給ひあんに頼母しく御才覺を加へ給ふべきに依て人の合力を待つに及ぶべからず。その故は人は早く變り困窮する事易しといへどもは長く屆き給ひ末まで變動し給ふ事なし。縱得ありても又は親しくても弱くあだなる人に頼みをかくなすべき事に非



ず。又時として向ふ指すと成なり。敵といふとも深く悼むべき事にあらず。今日は味方たるもの、明日は敵となり。又敵と思ひしもの、味方となる事もあれば。風の變るに異らず。かるが故に。汝の頼みを悉く拵にかけ奉り。即ち汝の恐れ奉るべきも。大切に思ひ奉るべきも。この君なるべし。御主汝が代りとして答へ給ひ。汝が爲によきやうにとのへ給ふべし。こゝには住果つべき住所なし。何處へ行きても旅人也。即今よりきりごとに合體し奉らんまでは。寛ぎといふ事あるべからず。こゝは汝の寛くべき所にあらざるに。何に心を止むるぞ。汝の住所は天なれば。世界の事をばたゞ通り行く路次ろじの如くに見るべき事也。萬事は過去り。汝も亦共に過行く也。これらに繫縛けいばくせられ亡ぼさるまじき爲に。彼に執着する事勿れ。汝の念慮をば高く上げ。汝のちらしよをば絶きりごとず。へ捧げ奉るべし。天上の幽玄なる事を工夫する様を知らず

んばきりごとの御ごばしよんに心を止め。尊おんき御傷ごきずに安住して。そこを心の栖家とせよ。その故はかの價高き奇妙なる御傷に。信心を以て近付き奉るに。を以ては。難儀の時節。大きな力を得。人のいやしむ事をも何とも思はず。惡口する者の言葉をもたやすく堪忍すべし。きりごとも世界にを以て賤しめられ給ひ。御難儀の中にを以て親しく思召されたる人々より見放され給ふ也。きりごとは御難儀を凌がせられ。人よりいやしめられ給ふに。汝は何を述懐しゆつぐわいするぞ。きりごとは御身を嘲り。敵對ふ者を持給ひしに。汝は萬民を味方となし。諸人よりほめあがめられたく思ふや。敵對ふ事いさゝかもなくば。何を以てか堪忍のかむりを與へらるべきぞ。きりごとに對し奉りて。敵對ふ事を凌がずんば。何を以てかきりごとの御知音とはなり奉るべき。きりごとともに御代を保たんと思ふに。を以ては。きりごとに對し奉りて。諸共に難儀を忍ぶべし。たゞ一度なりとも。きりごとの御内證に。



達して昵近にし奉りその燃立ち給ふ御大切を些かも味ひ奉るにをひては汝の損徳に拘はる事なく却て人より恥辱をしかけらるゝなほ喜ぶべし。その故は悉の御大切は我と身をいやしめさせ給ふもの也。眞實に思ひ奉り妄執を離れて自由解脱に至りたる者は妨げなく拵に逢着し奉り善の催しによつて我と身を忘れ念慮を天に通じ旨味に貧じて拵に寛ぎ奉る事叶ふべし。萬事を人の思ひさたする如くにはあらずしてたゞありのまゝに知覺する輩はまことの智者也。これ人の指南にあらず拵より直に教へられ奉る人也。心中に閉こもり外なる事をないがしろにする道を知る者は信心の所作を勉むる爲に所がらをも又時節をも選ばぬ也。内證に立入りたる人は外の事に全く心を散らす事なきが故にたやすく心中に引こもるもの也。肝要なる時は外の辛勞も故障も妨げとならずたゞ物に應じ時に従つて變化

する也。内心を丈夫にをさめずはりたる者は變り易く奸曲なる人間氣には拘らぬ也。外の事は身に寄付る程心を散らし身の妨げとなる也。心正直に直ならば萬事は吉事となり得と變ずべし。さりながら種々の氣さかひなる事心を亂す事の多きは未だ汝の身に達して死せず世界の事に離れざる故也。御作の物に妄に執着する程心を汚し繫縛せらるゝ事なし。色身の墓なき慰みを嫌ふにをひてはさいく天の御事を思案し奉りあにまの喜びに樂しむべき事叶ふべき者也

○清淨なる心と偏なる心宛の事

人は二ツの翼を以て世界の事より飛上るものなり。それといふは正直なることと潔きこと也。正直なる事は心宛にあり潔きことは好む所にあるべき也。正直なる心は拵に眼をつけ奉り潔き心宛を以て



懐付き味ひ奉る也。心中にをひて萬づの妄執を全く切斷したるにをひては何たる善作も妨げとなることあるべからず。拵の御内證に叶ひ奉ること人の徳になる事より外を歎かず尋ねざるにをひては心中自由にあるべき也。汝の心すぐならばあるしきの御作のものは皆行儀の鏡尊き御教の經文となるべし。いかに小さく下賤なる御作のもの也とも拵の御善徳を現し奉らぬはなし。汝の心善にして清淨ならば何の障りもなく萬事よき方に思ひとるべし。潔き心は天をもいんへるのをも抜け通る也。面々の内證の善徳に従つて世のものゝ上をも察する也。世界にをひて頼母しといふ事あらば心の清き人之を持つ也。若又汝心苦しき事みちたる所ありと言はゞ心の惡しき人之を覺ゆる也。黒金は火中にてその鎊を落し輝く如く拵に全く立歸り奉る人はぬるき心はなれ新しき人に成變る也。人ぬるくなり始むる時

はわづかの辛勞を恐れ世界の喜びにうつらふ也。然りといへども達して我身に克ち拵の御奉公に精進になり始むる時は以前かたく思ひし事もたやすく覺ゆるもの也

○智恵を明らめ給はん爲のあらしよの事

いかに量りなき御光明の光曜を以てわが心を明らめ心の暗を輝し給へ。妄想の散亂する事を拂ひ給ひ我を責むるてんたさんの障礙を滅し給へ。我味方となり給ひて強く戦ひ給へ。獸となる撫育の病を從へ給へ。これ即ち御力を以て無事を得尊き御殿宅となり清き心を以て御身を尊み奉る聲をひゞかすべきため也。風波に御下知を爲されよ。又大海に静まれと宣へ。又北風に吹く勿れと御下知なされよ。然らば即ち謐まるべし。御光りとまとを下し給ひて地上を輝



かし給へ。その故はおん身我を輝かし給はぬ間は我はたゞ益なく空虚なり土なり。御身のがらさを上より下し給ひ我心を強め勝れてよき身を生ずべき爲に地上を潤し信心を起し給へ。終りなき娛樂の甘露を嘗めて現世の事の思案等を氣苦しく思ふやうに罪科の重荷をせおひたるあにまを引上げ給ひて我望みを全く天の事につけ給へ。御作のものより來るほどの過去る喜びを我より引離し給へその故は何たる御作のものもわが望みを達して寛げ喜ばする事叶はず。解けがたき御大切の結びを以て御身に値遇させ給へその故は御身御一體のみ思ひ奉る人の爲に満足なり給ひ御身在まさずしては萬事も味なく益なし

○實もなき世間の學問に對する心持の事

いかに子人間の面白くこびて連ねたる言葉に心を靡くる事勿れ。その故は辨の御國は言葉にはなしたゞ善徳にあり。人の心を燃立たせあにまを明らかめ科を悔い悲ませ誠の心の喜びを起す我言葉を觀ぜよ。學匠なりと見らるべき爲に物を讀む事なかれ。たゞ惡の根を切るべき道を修行せよ。その故は多くの問難を知らめたるよりもこれはなほ徳となるべし。多くの理りを讀誦し識得したらん時一ツの根本に立歸る事肝要也。我は人に學問を教へ人間の教ゆる事叶はざる明らかなる智慧を初心の者になほ與ゆる也。我より語りきかする者は即ち智識となり速かに善道に先へ行く也。辨に仕へ奉る道を心懸ずして當時面白く消ゆる事をのみ好み人より習はんとする者は不便なる事哉。諸々の師匠の師匠諸々のあなじよの御主にて在ます面々の稽古學問の程を聞き給はん爲にまみへ給ふ時節到來すべし。



それと云ば人々のこんしゑんしやと行跡かうせきを糺明し給ひ又蠟燭ろうそくをともししてゐるされんとなる人の心中を訪ね探り給ふ時來るべきもの也。暗に隠れたる事も皆現れ諸人の問難皆口を閉づべし。我は謙へりくだりたる人の智恵を引上げ學校にて十年習ひたる學徳よりも刹那のうちに終りなきまことの道と學問を辨へさする也。我は言葉の音なく異説の心々なる亂れもなく我慢の規則もなく諍論じやうろんの問難もいらずして教ゆる也。我は土の事を卑め現世の事を嫌ひ終りなき事を尋ね終りなき事をあまなひ譽れを逃げ妨げを凌ぎ全く我に頼みをかけ我より外何を望まず燃立つ心を以て萬事に越へ我を大切に思ふ道を教ゆる也。その故は或人は我を發端はつたんより大切に思ふを以て妙なる理りを習ひ幽玄なる理りを學問するよりも萬事を捨つるを以てなほ智徳を得さする也。或人には常の事を語り聞かせ或人には一かどなる事を言ひ聞

かせ又人によりては假相けさうのしるべ瑞驗ずいげんを以て面白く現じ或人には隠れて深き理りを明かに告知らす也。經には同じ理りを書き顯はすといへども人に示す所は同じからず。その故は我は内證のまことのまこと教手おしえて人の心の探手さぐりてしうけん正念しやうねんの知手しりて所作しよさくの動手うごかして面々の功力に相當する分量を正し明らめそれに從て配當する者也

○信心を以て尊きゑうかりすちやを申  
受け來る道を教へ給へと頼み奉る事

いかに御主御身の御位とわが卑しさを思案いたす時は大きに振ひい  
詮方なく赤面し奉る也。近付き申さゞれば命の源を逃げ又功力りきに及  
ばぬ身として近付き奉れば罪に落る也。然しかれば御身は我御合力かうりきの爲  
され手時に臨んでの御意見者にて在ませば何と仕りて然るべからん



か。直なる道を我に教へ給へ。ゑうかりすちやを申受け奉る爲に似合の勤めを教へ給へ。その故はわが息災となる様に御身のさからめんとを信心うやまひを以てとり行ひ奉る爲に我心を何と調へ奉らんかを知る事最も肝要也

### 第六 御性體と御善徳を顯す事

去ば人の心を善に導く勸めの中に取分ニツあり。一ツにはおねすと申て善の善なる道理に依て勤めずして叶はざる事ニツにはうちれとて其徳深き事是也。是に依て諸の學者の云く此ニツは萬行に付て人の心を起す策也と。中にも徳を得る方をば人ごとに好むといへども善の善なる道理は猶以て強し。故に\*ありすとうてれすの云く賢き人ならば科に落んよりは何たる損をも受んにはしかじと思ふべしと。所以を如何といふに善の勝れたるにたくらべては何たる現世の利養か是にしかんや。去ば此卷の極めといふは人を善のみやびかなるに引なびけ専ら一向に心を善に起さしめんが爲なれば勝れたる事より是を初むる者也。其といふは則善の體にて在ます御現在にをひ



て善の外に望み給はず別に授け給ふ事もなく御用ひなさるゝ事もなければ我等仕へ奉らずして叶はざる道理莫大なるが故に善の勤めも又せずんばあるべからず。然るに御主何たる故にか善を納むる事をうけ給ふぞといふ道理をも爰に論ずべし。是皆我身を少も残さず<sup>たま</sup>に捧げ奉るべき道理なりと知るべし

第一には<sup>たま</sup>掎<sup>たま</sup>則<sup>たま</sup>掎<sup>たま</sup>にて在ます事。是最上にして思ひ量るべからず。

此内に量りなき御智恵限りなき御威光御自由自在御柔和忍辱御慈悲御憲法御美麗清淨御福德樂み御心のまゝの御満足以下の諸善諸徳無邊にして思量られざる儀籠る者也。或學者の云く此御徳儀の廣大に在ます事を述んとせば四海を墨筆にし森羅萬像を紙にし大海はひがたとなり筆者は虚しく劫をふるといふとも御一善をも書盡すべからずと。又云く<sup>たま</sup>掎<sup>たま</sup>もし人を斯く造らせられ昔今にたぐひなき智恵を御

與へありて御身の徳の只一ツを辨へさせ給はん時<sup>たま</sup>縦<sup>たま</sup>ひ普き世界の人の心を一ツにして與へ給ふといふとも御合力<sup>かみりよく</sup>なきにをひては甘露を含む喜びに堪へずして心破れて危きに及ぶべしと也。是御主を御大切に存じ随ひ仕へ奉るべき道理の一ツ也。然れば別の子細に拘らず只御一體のみ尊く在ます一理を以ても深く敬ひ奉らずして叶はざる事と知るべし。喩へば帝王國を出給ひ如何なる所へも御幸<sup>かき</sup>なるべきに御恩に預からぬ者也とて帝を欽<sup>あか</sup>め申さぬ人や有べき。況や是は天の帝にて在ますをや。\*さんじよあんのあほかりびせに彼御衣の裳そに *Rex regum, & Dominus dominantium. Apoc. 19* 帝王の上の帝上主の上の御主也と縫出し給ふと見へたり。是即御智恵と御力と治め計ひ給ふ所の三ツを以て世界を提げ給ひ有情非情をあらせ給ひ天の廻りあし。月日星の光り四季の移り變る政と雲水の行衛までも思召まゝに計ひ



給ふ御主にて在らずが故に萬像森羅に御恵みを施し給ひ御身は余所より聊も受給ふ事なく初め終り在まらず只御一體にて在ます也。喩へば人は生得蟻はいよりも大きなる如く拵たごは天地にも萬の物にも限りなく越へ給ふ御體にて在ませば天地萬のものも御前にをひては蟻はい一つの譬にも及ばず然ば拵たごを敬ひ奉らずして叶はざる道理量りなしといへども此儀に越へたるはなし。故にもし人數限りなき身と心とを持といふとも悉く捧げ奉らずして叶はざる道理なりと心得よ去ば古への善人達も此謂れを知しめして拵たごの御大切に對して聊も私の依怙を交へ給はず潔く偏に御大切のみに燃立給ふ者なり。是に付て\*さんべるなるど眞實達したる大切といふは頼敷心を持ても力を得ず頼敷心のなきを以ても力を落す事なしといへり。此心は御返報を頼みて御奉公に勵むにもあらず又御返報のあるまじきとて心を

弱らす事もなし。只身の依怙に引れずして彼量り在まさぬ御哀憐深き御善徳を偏に思ひ奉る御大切ゆへぞといふ儀也。此道理尤強しといへども善徳未だ達せざる人の爲には猶弱し。それを如何といふに第一わが身の大切強きを以て身の依怙を本とすればなり。二ツには愚鈍蒙昧なるが故に彼最上の御哀憐を未だ辨へさればなり。其智恵にたけのぼりたるにをひては只此第一儀を貪り見て少しも他事を尋ぬ可らず。爰を以て拵たごの廣大に尊く在ます御所を知しめんが爲に\*さんぢよにじよの筆の跡を尋探りて茲に顯す也。彼學匠みすちかてよろじやといふ書籍を作り給ふ志といふは萬の人に拵たごの御體の限り在さぬ事と萬の物の差別を知しめ給はんが爲也。然に拵たごの御體を窺ひ奉らんとせば先萬の物より眼を放てと教へ給ふ者也。故に御作の物より心を離れ萬の物の性體の上の尊き御體美しく潔よき光の上の



御光を見立奉るべし。此御光の御前には萬の光は暗闇なり。此潔よく美しきの御前には萬の美しさは汚れなり。昔もいぜす拵へ物を申上奉らんとて雲を分入給ふに其眼黒雲に包まれ拵の在さぬ外をば何をも見給はざりしとあるは是也。猶明かに辨へ奉らんとせば御作の物と御作者は天地よりもはるかに隔り給ふと心得よ。御作の物は其初めあれば終る事叶ふ者也。御作者は始め終りと申事さまさず。萬の物には上あり又他力をかる者也。拵は限り邊りもましまさぬが故に少も他力を借り給はず。萬の物は移り替れども拵は少も移り替り給はず。萬の物は因みを以て合せたる者也。拵はぶうるすびりつと申して因縁和合といふ事なき清淨の靈體にてまします也。若拵の尊體に合せ奉るといふ事あらば其合手あるべし。是又曾て叶はざる御事也。萬の物は其體次第くゝに重り智恵も又ます事叶ふ者也。拵

は萬の物の元にて在ませば更に次第に御徳を重ね給ふと申事なし。本より自ら御前には三世の隔もなく萬事備りて在ます也。萬の物は不足なる物なるが故に達すべき道を尋ねて常に自ら移り替る者也。拵は御心のまゝに達し給ひて在ますが故に曾て移り替り給ふ事なし。畢竟萬の物の體は限り有が故に徳にも用にも限りあり住する所にも又限りあり其姓名も限りあり。然るに拵はいんひにとと申して廣大無邊の御體にて在ませば諸の御善も徳も量りも邊りも在まさずと雖も諸の御名あり。其故は夫々に籠る諸徳圓かに備り給へば也。爰を以て辨へよ。萬の物は限り有が故に知盡す事も安し。拵の尊體は量り在さぬが故に凡慮不思議の一事也。昔し\*いざいやすの見給ふ二體のせらひんは拵の御脇立として高き臺の左右に座し何れも六ツの翅を對し二ツの翅を以ては御顔をおほひ又二ツの翅にては御足を隠



し申されしと也。此上を注して云く惣じて顔と足といふは始め終りを顯す儀也。然にせらひん<sup>ア</sup>の御顔と御足をあほひ申されしと云は天にをひて諸のあんじよべやと尊體を直に拜み申さるゝ中にもせらひんは其位最上なれば余に越てま近く<sup>ア</sup>を拜み申さるゝといへ共始め終り在まさぬ御所は全く知り盡し給ふ事なしと。既にけるびんは<sup>ア</sup>の御智惠の御寶を納め給ふ司なりといへども其を辨へ給はざれば<sup>ア</sup>はけるびんの上に在ますと申奉る者也。\*さるみすたの云く<sup>ア</sup> *posuit tenebras latibulum suum. Ps. 1. 18* 御臺は闇を以て圍み給ふと。さんばうろ是を注し給ひて。 *Luce in inhabitat inaccessiblelem. 1. Tim. 9* 誰も近付き奉る事叶はぬ光の中にましますといふ心也と。此御光に眼盲みて見奉る事叶はざる處を闇とは注し給ふ者也。或學者の云く日輪にまさりて明なるはなしといへども其光り甚しくて眼の力弱るが故に尤

見がたき者也。其如く<sup>ア</sup>は明かなる分別智の境界にて在ませども萬の物の中に第一辨へがたき御上は是なりと。此故に尊體を辨へ奉らんと思はゞ智分の及ぶ程御善徳を見奉りさて其後に彌辨へざる事限なしと分別せよ。是程凡慮に及び給はぬ御主也と深く心得奉る程其智惠にたけたりと知れ。\*じよぶの云く *Qui facit magna et inscrutabilia, & mirabilia absque numero. Job. 5* 廣大にして悟りがたき無量の御ことを爲し給ふと。\*さんげれごうりよ是を注し給ひて萬事叶ひ給ふ<sup>ア</sup>の御所作は忙然として辭なき時辯舌利口に讚談す。譬も辭も及ばぬ儀は默然として案ずる時顯はるゝ者とと。\*さんぢよにじよの云く諸の智惠を越給ふ<sup>ア</sup>の御秘密は謹んで深きあにまの敬ひ默して尊み奉るにありと勸め給ふ者也。\*さんとあぐすちの<sup>ア</sup>の御體は見ゆる物と見へぬ物の諸の體に勝れ給ふ所を指てわが尋奉る<sup>ア</sup>は全く色相に

でうすの御性體と御善徳を顯す事



あらず眼に遮る光に非ず糸竹の聲に非ず名花の薫ずる匂ひにあらず舌に覺ゆる味に非ず只光の上の御光耳に聞へぬ聲鼻も及ばぬ異なるかほり萬の味の上の味にて在ますなり。此御光は所なき所を照し給ひ此御聲は聲なき所に聞え給ひ此御匂ひは風の傳へぬ御かほり甘味は口を離れたる所に試み奉る者也と言へり

右廣大の御所を窺ひ奉らんと思はゞ大海の一滴を汲んで水上を知んが爲に御作の物を見よ。\*さんぢよにじよの宜ふ如く萬の物に體と精と態と三ツの事備りたり。此三ツともに相應の體に等き精あり又其精に等きわざある者也。是を踏へとして森羅萬像廣大にしておびたゞしきにつし藤次を亂さず治まるを見よ。茲に或學者の云く。數限りなき星の中に大海と世界にも越て九十相倍大なる星ありと。猶又野山の千種萬の木海河の雲水を栖とする生類いくそばくの數を知

ず是皆餘る事もなく關る事もなくそれ〴〵に應じて不足といふ事なし。\*さんとあぐすちの宜ふごとくかほど不思議なる世界の森羅萬像一ツとして道具造作も入給はず時節を経ずしてあれと思召御内證一ツを以て種なくして作り給ふ者也。千々萬々の世界を作り給ひ又一ツもなきやうにし給はんも輒く御自由に在ますと心得よ。右の\*さんぢよにじよの註し給ふ旨を踏へとして御作者の御力其御體の廣大に在ます事如何計ぞといふ事を觀ぜば誠に萬事に超給ふ微妙不思議の御主也と知奉るべし。かほど量りましまさぬ御力と尊體を觀じ奉らば誰か驚く事のなかるべき。直に拜し奉らずといふとも是程の道理を以て微妙不思議の御主と誰かは辨へ奉らざるべき。是に付て\*さんとます譬を引て云く四大皆勝れたる程大也。土よりも水は大きに水よりも風は大きに風よりも又火は猶大也。天の重なりも



上程猶々大きなれば諸の天の上なるいんびりよといふ天の廣大ならん事更に辭に述べ難し。爰を以て目に見へざる處と見ゆる處の諸の體の上にて在ます御作者の御體廣大無邊に在ますべき事歴然なれば御善徳も又其に等しく在ますずして叶ふ可らずと聊分別せよ。又けれじやすちことといふ經の二ヶ條に。Secundum enim magnitudinem ipsius, sic & misericordia illius cum ipso est. Eccli. 20. 扨たごの尊體の廣大に在ます如く御慈悲も又廣大なりと云へり。爰を以て量りなき御善量りなき御憲法量りなき甘味量りなき御大切の備り給ふ尊體なれば我等よりも量りなく恐れ敬ひ隨ひ奉るべき事本意也。喩へば人も高く尊き程其敬ひも深きごとく御上ましまさぬ尊き扨たごへ限りなき御敬ひ限りなき恐れ相當り奉る儀なりと心得よ。もし人の心に限りなき隨ひ敬ひ恐れといふ事あらば残さず其を捧げ奉らずして叶はざる事と知るべし。

右の道理を以て御主を御大切に敬ひ隨ひ仕へ奉らずして叶はずと辨へよ。此御哀憐深き御善徳を御大切に存知奉らずして何事をか思ひ此御威光を恐れ奉らずして何をか恐るべきぞ。此君に仕へ奉らずして誰人にかつかふるべき。去ば人のおんたあでの境界といふは萬事に付て好事なれば是程諸善諸徳の充々て備り給ふ御主を争か存知奉らざるべきや。如此萬事に越て御大切に敬ひ尊み奉らざる事さへ傍若無人の科となるに人に越へ世に越へて遠ざかり背き奉るべきは如何に。一旦の邪まなる樂み僅なる名聞一紙半錢の利益にひかれて扨たごを違背し奉る事誠に人に越へ世に越へて背き奉るにあらずや。加程まで人間の惡逆盛んになりぬとは誰か心得べきや。此等の族うぢは如何なる天罰を招くとか思ふや。終りなきいんへるの苦患くげんをまふくるより外有べからず。是猶未むくふるに足らず。爰を以て扨たごを敬ひ



隨ひ御大切に恐れ仕へ奉らずして叶はざる道理皆是に籠ると知るべし。去ば此道理の強き事をいふに現在にて如何なる威徳の大なる人に仕ふる道理なりとも<sup>サカ</sup>拵に仕へ奉る道理に比べ奉りては同き日にもいふべからず。其故は御作の物に備はる善の位を<sup>サカ</sup>拵の御威光御善徳になぞらへては威光とも善徳ともいふべき事に非ず。同く科の上をいふに御作の物に對する科を御作者に對し奉る科にならべていふべき事にも非ず。故に\*だびつ帝王は臣下なる\*うりやすが妻に密懷して剩へ其夫を殺し給ふ時其人に當る罪といひ女の爲の恥といひ國士の萬民の嘲りといひ一方ならぬ重罪也といへどもべにてんしやの時に臨んでは。Tibi soli peccavi. Psal.50 只<sup>サカ</sup>拵に對し奉りてのみ科を仕りぬと宣ふ者也。是皆科を以て人に對する狼籍數々也といへども<sup>サカ</sup>拵の御掟を背く誤りに比べてはなきが如し。是をさし給ひて\*だびつは

只<sup>サカ</sup>拵のみに對して科を仕ると悔悲み給ふ者也。其故は<sup>サカ</sup>拵は萬物に超へ給ふ事廣大無爲に在ますが故に我等仕へ奉らずして叶はざる道理量りなく<sup>サカ</sup>拵に背き奉る處の科も又限りなく深き者也



## 第七 御扶けの御恩の事

あんどよの智慧にもはかられず増てや人間の分別にも及び奉らぬ御扶けの上を述奉らんとするに我その器に非ず辭と心の道も絶果たる事なるに依て人に勸むる善の爲に用なき事と知るにをひては此堆き理りを愚かなる智慧を以て申汚し奉らんよりも無言して尊み奉らんにはしかじ。昔し双びなき上手の繪かき或帝王の姫宮の隠れさせますを上より下に至るまで歎きあへる有様を一ツの畫圖に顯すに御母上の御歎き泣啼焦れ在ます御質までもさながらありのまゝに寫し出せり。然れども國王の御歎きの玉顔は筆にも及ばざりしかば只物の影をもて玉顔を隠し奉りたる也。然れば御作の御恩さへ言語に及ばぬ處なるに扶け給ふ御恩の上をば何と申上奉るべきや。一ツの

御おんたあでもて世界を御作なされしといへども我等を扶け給ふ御調へをば三十餘年の御苦勞を盡され終に玉體に針さすほどのすきまもなく御疵を受させられ尊き御血を流し給ひ御皮肉は打破られ給ふ者也。かゝる廣大の御理りを演奉るべき事進んでは才智の拙き事を恥ぢ退ひては天命の量りなき所を恐る。然れども此一大事を大海の一滴計も演ざらんは御恩を知らぬ者となるべし。是に依て言語道斷微妙不思議の一儀を聊申述べけれども御譽れとはならずして却て申汚すに近かるべし。故に天にをひて諸のあんどよべやと御讚談の達したる道に至らせ給へと仰ぎ奉る

抑人間御作の初めばらいぞてれあるにをひて榮花の數を極めさせ給ひ高き位に備へ置給へば其御主を御大切に恐れ敬ひ奉るべき事本意なるに却て嬌慢に誇り拵へ背き奉らん企てをなすが故に彼安樂世



界なるてれあるを追ひ放たせられ此苦しみの海山に分入。偏に天魔の科に與みしていんへるのの苦患を受べき身となり果る者也。如此人間<sup>サマ</sup>の御勘氣を蒙り奉り進退茲に極り爲方なき身と成果たる處に掛まくも忝なくも御主に對し奉りて犯し申せし狼籍を尊き御哀憐の御上より全く知召されぬが如く御憐みの眸りを廻らし給ひ御罰よりも御憐みを先にたて給ひ我等が爲の御なかだちとして御子を天降し在まし御勘氣を救し給ふべしとの詔りをなし給ふ者也。故に此御子下界へ下り給ふを以て勤め給ふ御事といッば先我等が罪業をゆるしなざるべき道として<sup>サマ</sup>の尊體と拙き人身を一ツの境界に合せ給ふ者也。嗚呼言語道斷の御業さ哉。おと惡人とは如何計の懸隔とか思ふや。今又おと人間と御一味なざるゝ事に勝りて猶近き事あらんや。\*さんべるなるどの宜ふ如く御主<sup>サマ</sup>よりほかに尊き極めの在まざる如

く人の身の元となる土より外にさがりたる物なし。然るに<sup>サマ</sup>微妙不思議の御謙りをもて土まで天降り給ひ土は最上の位となり<sup>サマ</sup>へあがり奉り土は<sup>サマ</sup>の御所作を致し<sup>サマ</sup>又土のたゑ忍ぶ事をも試み給ふと申奉る程御一味なざるゝ者也。此御一味の強き事をいはゞ御ばしよんの崩御に及びて御色身御あにまの處は離れ給ふと雖も<sup>サマ</sup>の尊體御あにまにも御色身にも離れ給ふと申事なし。爰をもて思へ。我等に對し給ひて一度受合へ給ふ人界を<sup>サマ</sup>の尊體より放ち給ふと申事なし。初めの人忽ちに<sup>サマ</sup>の御勘氣を蒙りし時ばらいぞてれあるの傍に逃げかくれ進退茲に窮まるべきに人有て<sup>サマ</sup>の尊體に人間の色身あにまを受合せ給ひ御扶手來り給はん時あるべしと告るにをひては如何ほどの喜びなるべきぞや。然るに人を扶け給はん爲に人界を受合せ給ひ限りなき御恩を施し給ふのみならず猶言語に及ばぬ御勳功さらさ



ら凡慮にはかられぬ事也。爰にをひて我暫く謹で御主へ申あげ奉る。抑我等が勅勘を赦し給ひいんへるのを遁し給ふ御恩深しといへども猶是を調へ給ふ道は甚重き御恩也。御身のなし給ふほどの御事皆不思議に在ますが故に其一ツを觀ずるを以て我心の解渡りあにまの精根も中絶て忙然としてあきれ果ると申せども又別の一ツを觀ずる時猶又微妙不可思議にして初めの一ツはなきが如し。是即ち御譽れの御疵とならず却て御譽れの量りなき所を顯し給はんが爲也。然ば御主御辛苦なしといふ共我等を扶け給ふべき道様々無量に在ますべきに只量りなき御憐みと御大切の處を知しめ給はんが爲に不思議千萬の道を撰取り給ひ限なき御苦しみを受こらへ給はんと思召さるゝ者也。故にせまにやといふ所の森の内にては其御觀念計をもて御血の汗を流し給ひ御身に直に受給ふ御ばしよんのきはになりては大地

も既に震動し岩石までも碎くる者也。かゝる微妙の御大切は天上にても讚談しあんどよも恭敬し給へと謹で希ふ所也。如何に御主我等が幸ひとても御爲には何事ぞ。又我等が殃とても御前に何事ぞ。\* じよぶの云く。Si peccaveris, quid ei nocebis? et si multiplicatae fuerint iniquitates tuae, quid facies contra eum? Porro si iuste egeris, quid donabis ei? Job. 35 汝萬の惡をなすとして御前に於て何の仇ぞ。縦ひ百善をなすとても如何なる功德とか受給ふべきぞと。去ば人間あんどよ悉く天にをひて直に仕へ敬ひ奉るとても更に御譽れの勝り給ふ御事にもあらず又悉くいんへるのに落て罵詈誹謗仕るとても御譽れの劣り給ふ事にもあらず。かほど百徳無量の御主御身に背き奉り極惡の罪人と成果たる我等を限り在ますぬ御大切をもて御扶け爲れん爲に下界に下り給ひ我等が科を亡し給ふ御償ひとして前代末聞の御苦しみをたゑ給ひ末代



にも有まじき御恥辱を受け給ふ者也。或時は我等が上を歎き給ひて御涙を流させられ。或時はぜじゆんの飢を凌ぎ給ひ又或時は道に草臥れ給ひ。又は極寒極熱の寒さ熱さを堪へ給ひ。終日終夜我等が上を忘れ給ふ時なく御枕を安く傾け給ふ御ひまも在まらず。終に我等が身代りとして悪人どもより搦められ給ひ。御弟子達より放たれ給ひ。御弟子達の中より賣られ給ひ。又一人の弟子よりはあらがはれ給ひ。彼權門の前にて無量の讒言をうけさせられ。御顔を打れ給ひ。つばきを咄かけられ。終に又打擲の責を受給ふ者也。惣て我等が科の報謝として。尊き御母びるぜんの御前にてくるすに掛られ。崩御なり給ふ者也。嗚呼かほど淺ましき貧苦に責められ給ふ中にも御末期に御咽かはき給ふに。御口を潤し給ふべき一滴の水さへなくて水の代りに酢を物にひたして捧げられ給ふ者也。此時に當りて。猶御親にて在ます。拵たてまばあてれもさし

放しまいらせらるると見へたり。さても驚くべき事かな。廣大無邊の御主くるすの上に死し給ひ罪人と額を打れ給ふ事。去ば如何なる下賤の者なりとも兼て知たる人罪ありてくるすに掛られ。さも淺ましき姿となるを見ては。不便至極の事哉と哀れを催す習ひ也。況や天地の御主何の御科も在まらずしてくるすに掛り給ふ御事をや。此廣大なる御慈悲を觀じて。九重のあんじよも悉くあきれ給ふ所に。我等かゝる不思議の浪にも溺れず。深き御慈悲の海にも沈まざる事は。猶不思議に非ずや。去ば我等を救ひ給ふ御恩尤深く在ますといへども。猶其上に撰び取給ふ道は。はるかに深き御恩也。凡慮に及ばぬ御恥辱言葉も絶たる御苦患を。直の御身に受給ひ。世の捨物と成給ひ。我等を扶け給ふ者也。御恥辱を以ては。我等に譽れを興へさせられ。御血をもて。我等が汚れをすゝぎ。御涙を以ては。我等を涙の淵より浮べ給ひ。死し給ふを以



て我等に終りなき一命を興へ給ふ者也。如何に甘露の御親御子と成奉る我等が上をかほどまで思召給ふや。如何によき牧士にて在ます御身羊となる我等が食物として下さるゝ事は何事にて在ますぞ。如何に二心在まさぬ御主我等を救ひ扶け給はん爲に御身を亡し御一命を失ひ給ふ事をも省み給はざる者也。かゝる御恩の御禮をば何と報じ奉るべきや。流し給ふ御血の代りとして如何ほどの涙にてか御心を潤し奉り御命の代りとして如何ほどの命を以てか報じ奉るべきぞ。もし入有りて此等の御苦患といふも萬民の爲に報じ給ふ御勤めなれば我身一ツに取て御恩といはむもさすがに相當らずと思ふべし。嗚呼あやまり畢れり。速かに其迷ひをすてよ。是を萬民の爲に勤め給ふと思ふや。我等一人づゝに當て同じごとくに調へ給ふ御功力也。ゆへを如何といふに量り在まさぬ智慧の源より御ばしよんを御目の

前に鑑み給ひ萬民を一人の如く見そなはし量りなき御大切を以て一人づゝを抱き取り給ひ一人づゝに對して御血をながし給ふ事也。惣て此御大切の廣大に在ます御處はさんと達の宜ふごとく萬の世界の中にをひて罪人一人ありといふ共萬民の爲に受給ふ御ばしよんの御辛苦を其一人に對して受給ふべしと見へたり。かほど限りなき御苦患をうけ給ふ上にも猶うけ給はずして叶はざる道理ありと知しめすにをひては猶々こらへ給ふべき御恩をば如何計とか存するぞや



## 第八 善人達のよきこんしゑんしやの悦 びの事

右すびりつさんちより與へ給ふ内心の悦びの上に今一ツ善人達の樂み給ふ事といふはよきこんしゑんしやの證據なり。是を辨へよ。拵の御惠みを以て萬物を養ひ給ひそれの極めに至らせ給はん爲に入程の事を與へ給ふ如く人間の上をも達し給はん爲に入べき程の事を争か計ひ給はずといふ事あらんや。去ば人の達するといふはあにまの精力の第一となる分別とあんだあでの二ツを達するにありと心得よ。分別には諸々の學問の下地となる智惠を與へ給ひあんだあでは萬の善の種を蒔給へば善には親み惡をば嫌ふ自の精徳を含むが故に善を以ては悦び惡を以ては悲しむ者也。此生付の精力の強き

事をいはば縦ひ其身の惡き癖をもて弱る事ありといふとも曾て其精力の減ずる事なし。喩ば人の自由は惡趣に落て次第に其精弱くなるといへども全く滅する事なし。其證據は昔\*じよぶと申善人様々の災難をうけ給ふ時從類眷屬在々所々にて敵より打亡ぼさるゝといへども其を告る一人の臣下はいつも残りたると見へたり。其如く惡人も今罪を犯す災ひ起り來り諸善を亡すといへども善惡を辨ふる智惠はうせずして失ひたる吉事きちじと淺間しくなり果たる進退しんたいを告知らする事いつもこんしゑんしやに残り留る者也

如此拵たごより眠る事なき起手おきて無言する事なき談義者草臥る事なき師匠を與へ給ふを以て深く善徳を御大切に思召るゝ御計ひ微妙の御内證を知せ給ふ者也。是をよく辨へたる\*ゑびてといふ學者の云く、親は子に惡を退き善に勸むる道を教へんが爲に若年の時より師匠の



手に渡すごとく、手人を御作なされし初より面々生れ付によしあしを覺ふる心の精徳をこんしゑんしやと號して師匠と渡し給ふ事は常に惡を退け善を行へと心をおこし勸むべき爲なりと。去ば此こんしゑんしやは善人の爲の守手まもりて師匠なるが如く惡人の爲には心の責手せめて訴手うたがへ苛責の人と成て悦びの中に苦しみを交ゆる者也。去ば惡人のこんしゑんしや心にくひつく事は荆棘のさし苦しむるに異ならず。此荆を知らんと思はゞ其謂れ數多あり。一ツには科は自不淨にして無道也。是を指て學者の曰く人のおもはくにも拘らず科の御照覽なしといふとも科の不淨を知るにをひては一惡を犯すべからずと。二ツには科といふは人の仇なり。即身の仇を求むる者也。三ツには科は惡名を遁れず生得人は他人に讃められん事を望み憎まるゝ事を嫌ふ者なれば科の惡名たゞずして叶はざる事を知るが故に身に悲しみをいだか

ずといふ事なし。或學者の云く萬民に憎まるゝに勝りて余に苦しき事なしと。四ツには一命の不定最期の悲み其御糺決と終りなき苦患の恐れ皆以て惡人の心をさし苦しむる荆也。かほど定めなき露の命の必死すべき事を思へばゑんじやすちこに見へたる如く其日はわが科の報ひをうけ諸惡邪惡の終りなりと知るが故に愁をいだかずといふ事なし。惡人の習ひは縦ひ少の苦惱を以ても必最期來るべき事を思ひ心の騒ぎ絶ざるが故に一命を惜む苦しみ甚しく墓なく空しき影に恐れて震ひをのゝく者也。或は國に疫癘をこりて萬民死しはて又は雷電地震の難に逢ても忽ち身の上かと恐るゝ者也。是皆あしきこんしゑんしやの證據也。如此茂りたる荆棘ち一ツに群りて惡人の心をさし苦しむる者也。是に付て\*じよぶの經に見へたる如く惡きこんしゑんしやは常に心を喰ひ訴ふる叫びの聲やむことなし。又心



易く居るといへども畢竟敵の謀略を恐るゝ者也。誠に悪人はいつも案堵の様に見ゆるといへども終に悪しきこんしゑんしやの恐れ絶る事有べからず。\*じよぶの云く闇より光へ出る事を難しと思ふなりと。此心は今住しける悪きこんしゑんしやの闇より出て無事案堵に移りあにまは<sup>て</sup>の御光をうけ奉る清きこんしゑんしやに住すべき事難しと思ふ者也。ゆへを如何といふに悪人の心は常に白刃をふむが如く恐れを懐かずと云事なし。死するとじゆいぞの恐れ心を動かし倍す科の御糺決の緊かるべき事を思へば<sup>て</sup>飲食の隙も更に心の寛ぎといふ事なし。喩へば大將の陣頭を守る兵は前後左右を圍むごとく悪人は常に騒がしき心の恐れに圍まれずといふ事なし。是皆悪きこんしゑんしやに付て\*じよぶの親みのいへる辭也。或學者の云く<sup>て</sup>の終りなき御掟は常に悪人の心に責かゝると。又ぼるべるびよといふ

經の廿八に。Fugit impius, nemine persequente; iustus autem quasi leo confidens absque terrore erit. Proverb. 28 悪人は誰も追ざるに逃げ善人は獅子王の如く強く猛き者也と。\*さんとあぐすちいによ是を注し給ひて如何に御主誠に是御身の御定め也。悪人の亂れたる心はそれ即身の苦しみ也と宣ふ也。見よ悪人はこんしゑんしやのみに限らず常の進退皆もて如此。萬事に<sup>つ</sup>をみだしながら争か案堵の思ひに住すべきぞ。手足筋骨のつがひく遠ふ時は其痛み尤たへがたき者也。又四大それの陶り所を離るゝ時は如何計の騒がしき事をなすと思ふや。又色身の血氣亂れて血の道違ふ時は如何ほどの病をか生ずると思ふや。生得人は道理をもととするがゆへに道理に随つて勤めず亂行不法なるにをひては争かなやみ亂るゝ事のなからんと思ふぞ。誠なる哉貴き\*じよぶの金言 Quis restitit ei, & pacem habuit. Job. 9 <sup>て</sup>に背き



奉りて誰か案堵の思には住すべきぞと。\*さんげれごうりよ是を注し給ひて、すま拵の大なる御奇特を以て萬物を御作なされし如く面々其身を巢立んが爲に次第たゞしく定め給へば御作者の御掟を背きてそれぞれの次第なきにをひてはともに無事を失ふべき者也。すま拵の定め給ふ御掟にもれて争か無事を得んと思ふぞ。すま拵に隨ひ奉るを以て萬事案堵の思ひをなし又御法度に違ふ時はことごとく覆りてつし藤次正しからざるが故に眞の無事を失ふ者也。是即惡のあんじよと人の元祖の上に見へたり。私の望みを本としすま拵を背き奉り御法度に隨はざりしあんじよは天上の位を翻していみじき無事を失ふ者也。人も又天の御掟を背かざる以前善の位に住して其身を無事に保といへども御掟を背きて後は忽ち心亂れ騒ぎて色身ともに戦ふ者也と。是皆\*さんげれごうりよ注し玉ふ也。\*さんとますも又是に等き道理を注し給

ふ者也。然ばすま拵の御憲法を以て現在より惡人に與へ給ふ殃の一ツといふは右に顯はす心中の苦患是也。\*さんとあんほろじよの宜くこんしゑんしやの疵に勝りて何事か苦しき事あらんや。但此苦しみに替るにをひては或は失墜或は火事或は病又は如何なる痛みをもても厭ふべき事に非ずやと。\*さんじどろの云く惡きこんしゑんしやに勝りて苦しき事なし。故に汝常に悲しみを遁れんと思はゞ行跡を正しくせよと宣ふ也。又此道理眞實なる證據としてひいのですの光をうけざるぜんちよの學者までも惡人の上に定りたる苦慮ありといふ事を知るが故に\*せねかの云く人目を凌ぎ惡名を厭ふ事は何事ぞ。只汝がこんしゑんしやよきにをひては世界をも證據とせよ惡しきこんしゑんしやあるにをひては獨なりとも心騒ぎくるしむべし。汝善事を爲すにをひては縦人は知らずといふとも汝はそれを知るが故に隠



すに益なし。嗚呼かほど明白なる證據を蔑如にする汝はさても不便なる者哉。其故は諺に云く自己のこんしゑんしやは他の千人の證據に同じと。又云く第一罪の報ひと云は則罪を犯す事也。汝が罪の恐敷證人と云は則汝が身より外になし。他人をば皆逃る事叶ふべし。我身よりは逃る事更に叶ふべからず。其罪則身の苦しみとなれば也と。又\*つうりよの曰く善惡に付てこんしゑんしやは大強の者なるが故に犯さざれば恐れなし犯せば恐れのためる事なしと。是常に惡人の凌ぐ苦しみの一ツ也。現世より初て未來までうけ續く苦患是なりと。いざいやすといふ經に永却不退死する事なき蟲といふは惡人のこんしゑんしやかみ付苦しむるとあるも是也

§一 善人の樂みとなるよきこんしゑん

しやの悦びの事

然るに善人達は右に顯はす惡きこんしゑんしやの苦しみを遁れ給ひ。則すびりつさんと彼あにまにうへ置給ふ徳本の善の實を味ひ試み給ふ者也。喩ばばらいぞてれあるに定め置給ふ花園はすびりつさんとの御翫びなさるゝ御園に等き也。是に付て\*さんとあぐすちいによぜねじすといふ經の注に宜く善人のよきこんしゑんしやの悦びはそれ則ばらいぞなりと。爰を以て諸善備り給ふ善人達を指てゑけれじやと呼給ひ同じくがらさと潔よき心の悦び充々給ふゑけれじやを指てばらいぞとよび給ふ事其道理ある儀也。又云く來世にて眞の甘味を尋る汝則其を約束し給ふ御主の御掟を保つにをひては現在にて何たる辛苦難艱の中にとありとも其甘味を見付べしと思へ。惡より生



ずる子に勝りて善の實の味ひある事をば時節を経ずして試み知るべし。又惡きこんしゑんしやを以て身の樂みを極むるよりもよきこんしゑんしやを以て辛勞を凌ぐは猶眞の甘味となる悦びのほどを試み知るべしと宣ふ也。故によきこんしゑんしやの悦び如何計深きぞといふ事を辨へよ。喩ば蜜は生得甘きものなるが故に苦き物をも甘くなすごとくよきこんしゑんしやの悦びは現在の辛苦を甘くして悦びと變ずる者也。又惡は生得無道にして不淨なる物なれば惡人の苦しみとなるごとく善の美しく清きを以ては善人の悦びとなる者也。是を指てさるも百十八に *In via testimoniorum tuorum delectatus sum, sicut in omnibus divitijs. Psal. 118* 御主の御掟は眞實まさに廉直也。金玉よりも價高く蜜よりも尙甘しと。是御掟を保つをもて悦びを得と知らせ給はんが爲に如何に御主御掟の道は世界にあるほどの實に等くわれ悦

ぶと宣ふ也。\*ばるへたの御子さらもんも是を述べ給ひて *Gaudium iusto est facere iudicium. Prou. 21* 善事を爲す事は則善人の悦び也と。去ば此悦びの由來多しといへども分て善の美しく堆きよりをこる物なれば更に凡慮の及ばざる儀也。是を指て\*さんとあんぼろじよ今生にて善人の果報はよきこんしゑんしやに極るなりと宣へり。是則我等が一命を無事に榮ふるほど善の美しさと光を持有者也

去ばぜんちよの學者さへ惡きこんしゑんしやに苦しみある事を辨へよきこんしゑんしやには悦びありといふ事を知るが故に\*つうりよの云くよく生涯の隙を貴き勤めに使ふ人は大なる悦を得る也。それを行ひすますにをひては辛勞の重荷を覺へず却て輕くなすといへり。\*せねかの云く知者は常に悦ぶ者也。是よきこんしゑんしやの水上より出る也と。右ぜんちよの學匠は後生の徳を樂まずといへど



もよきこんしゑんしやの悦びある事をば大に讃めあげけるに況や現當二世ともに大なる吉事と御返報を定めおき給ふ天の快樂を辨へ奉るきりしたん争か是を益々樂まざらんや。又爰に勘辨すべき事あり。縦よきこんしゑんしやの證據ありといふ共貴き恐れを兼ずんば有べからず。此貴き恐れあるを以て正路しやうろなる頼母しきを得るが故に弱き心を強らして信力も堅固になる者也。此恐れなきあにまは眞の道を失ひ偽りたる無事高慢の基となる也。故に善人達の樂み給ふよきこんしゑんしやの證據といふは善より出る德儀の内の一ツなりと勘辨せよ。是をさして\*さんばうろ *Nam gloria nostra haec est, testimonium conscientiae nostrae. 2. Corint. 1* 我等が樂しみといふはよきこんしゑんしやの證據なりと宣へり。此心は正直にして潔よくわが智慧を本とせず。行跡を正しくするにありと宣ふ儀也

然に此内心の悦びの大なる事は昔今の善人達の上に多く見へたり。如何程の難儀如何程の辛勞をか凌ぎ給ひ苦痛逼迫の中に在ませども其善心に立歸り給へば明らかなるこんしゑんしやの無事を見付忽ち悦びを懷き給ひ信力堅固の心を發し給ふ者也。其故は只此一儀あるにを以ては余は皆さもあらばあれ世界の損得ともに益なしと辨へ給ふ故也。右こんしゑんしやの證據明かなる事は現在にを以て知る事難しといへども曙日に先立て輝く時は四方朗になる如くこんしゑんしやの明かなる光を以てあにまを照し現在より其悦びを生ずる者也。\*さんきりぞすとも是を述給ひてよきこんしゑんしやは何たる悲み來るといふとも深き淵に落るほのこの如くやがて消ると宣ふ也



## 第九 世界と惡の執着に引かるゝ人の 迷ひを導く事

爰に善の道を恐るゝ人の脈をとり試るに僞り多き世界の執着より起る病也と見へたり。僞りといふは世界のむなしき好事かじを外に見せて愚人を付り深く執心の迷ひに引落す者也。喩へば物に驚き易き馬は危からざる事にも故なく驚く如く世間者は樂みなき事に樂みありと見て其執心を離るゝ事なし。去ば僻ある馬を乘直す爲には又彼が恐るゝ道よりのり入る事あり。その如く實もなき世界の執着に引留めらるゝ輩もそを厭ひ離るべき事なるにあだなる世の樂みにつながら居る事は誠に果報拙く愚なる事かなと觀ずるをもて深く厭ひ捨べき事専ら也。然に世界の榮花の墓なくあだなる事多しといへども其

大略をあげて爰に示すべき者也

### § 一 世界の榮花のみじかき事

現在の樂みを論ずるに墓なき世界の榮へ衰へ一命の長短皆もて目の前の事なれば委く示すに及ばず命長き人とてもわづかに百年にみたず。消安き露の命を頼みて一旦の邪よこしまなる樂みに耽る事墓なき事に非ずや。昔より數輩の帝王大名高家の人々如何程か其位を得給ふといへ共或は日を経ず月を累ねずして死し給ふ事其例多き者也。\*さるきりぞうすとももの宜ふ如く縦ひ三百歳の齡を保ち樂み身に餘るといふとも未來永々の果しなき樂みに比べば夢幻の如しと也。\*さらもんの宜く縦ひ人長生して心のまゝに振舞といふとも闇の時刻と終りなき日を思案すべき事尤也。其日來らばこし方のあだなる事を見



知べしと。又いざいやす十九に見ゆる如く、惡人の一命は夢中に飢たる人の食し渴したるは飲むと見ゆれども覺て後は飢を扶けず其渴を止ずして飲むと思ひし樂しみは皆偽り也と知る者也。古より今に至るまで如何程の帝王將軍か如此ならずといふ事ありや。\*ばるつぼろへたの云く、猛き獸を隨へ飛鳥を狩取り人のもてなす金銀を山と積み財寶に限りなく寶の器の數を盡して畜へ置し大人大家は今いづくにあるぞと。誠なる哉いくばくの大名高家か死し果ていんへるのに沈み今は其實皆他人の物となり跡形もなくなり果たる者也。世に名を得たる智者學匠も今いづくにあるぞ。\*さらもん帝王の榮花又は弓箭を取て天下に眼高かりし\*あれしあんでれ帝王の威勢を初として代々に名高きろうまの帝王達或は財寶に飽きみち威勢盛んなりし臣下大官は今いづくにあるぞ。虚き烟と上り雲と消にしぞかし。爰

を以て世界の榮花の墓なき事如何計ぞといふ事を觀念せよ

§二 世界の榮花には災おほしといふ事

去ば此世界は人の流され所定めなき苦しみの海涙の谷と號するが故に悦びを究むればやがて悲みの來る事を免れず情是を案ずるに人の一生涯は時を重ね日をそへておこる所の殃向ふ所の苦しきは擧げて數ふるに足らず身の病あにまの苦しみとなる妄りなる憤り人よりかくる殃も又更に量られず時によりて所知財寶を奪はれ外聞を失ひ嫉み嗔れる思ひに咽び罵詈誶せらるゝ事を先として無實讒言の後には身を失ひ命を亡すのみ也。加之折に觸れ事に隨ひて思はざる時難儀難艱のみ向ひ來る者也。或は五體をあやまつか或は水に溺るか或は馬より落ちて煩ふか命の迫る道多し。尙よく是を辨へんと思



は、此等の苦しみに馴たる人に問へ。正直なる秤をもてかくるにをひては、苦しみははるかに重く、樂みは懸隔に輕かるべし。只一時の樂みを遂んが爲に、百千の時日を累ねて、其苦しみを凌ぐ者也。加程墓なき一命の上に、凌ぐ所の苦み隙なきにをひては、眞の樂みを求むべき隙は、如何程へべきとか思ふや。是此世界の苦しみの海を渡り、浪風の難をともしにする善惡の人々の上に當る所のわざはひ也。尙哀なる事といふは、惡人に限りて災多く來る事あり。是別に非ず、彼が惡逆を辨へ懲すべき爲に、肝要なる儀なれば也。さびゑんしや五に罪人死期にいふべきは、我等罪の道につかれ、又行道もけはしき也。御主の平なる道を終に知らずと。爰をもて見よ、善人達現世のばらいぞより未來のばらいぞに移り給ふ如く、惡人は惡きこんしゑんしやを以て、現世のいんへるのより未來のいんへるのを待者也。猶惡人の上にをひて、此等の

災の種となる事多き者也。先<sup>天</sup>の御憲法の上より惡を罰し給ふ事、來世のみに限らず、多分現在より與へ給ふ者也。世の御計ひは萬民の上になべて顯れ給ふといへども、又一人づゝの上にも、取分計ひ給ふ事あり。故に世界の惡逆盛なる時は、飢饉、兵亂、疫病等の御罰を與へ給ひ、又それぞれの罪に應じて、各々の御罰をも與へ給ふ者也。此等の證據、經中に多しといへども、略して茲に載せず。又でうてるのうみよ七に惡人現在にて、様々の辛苦を凌ぎ、苦痛に責らるゝといへども、其謂を知らざるが故に、只生得の事とのみ思ひて、全く御罰とは辨へざる者也。又生れ付に好事<sup>カウジ</sup>を與へ給ふといへども、御恩とも知らず、御禮を申上ざる如く、御罰を受る時も御罰と心得ざるが故に、行跡を改むる事なし。其外惡人の上にをひては、内外よりをこる様々の災、苦しみ、難儀等、あげて數へ難き者也。



## §三 世界の榮花には偽り多き事

去ば右の道理に限らず世界の墓なき榮花より起る所の惡逆更に量りなし。其即人を不淨になし分別を盲まし萬事に定相なく思はざる時其樂みも盡はて甘き乳味に苦き物を交ゆるがごとく世界の榮花も偽り多く人を付り邪路に導きなき事を有顔に見せ持ざる物を約束するが故に玉ならざるを玉かと思せ黄金にあらざるを黄金ぞと見せて外相によき色を顯し付かる者也。是をさして\*ありすとうてれすの言へる如く外は強く眞の道理に勝ると見せて無理多きごとく世界の榮花の偽りたる一ツといふは外は眞の好事に勝ると見する惡逆世に多き者也。喩ば鳥のわなにかゝり魚の釣にかゝるが如く愚人は是にかけとめられ全く遁れ得ざる者也。生得色體はあるほどの物の初め

におもは和なる事を見て好ましく思ひとり付といへども試て後は忽ちあは餽の中に隠たるつりばり有事を知り外に麗しき光を見するといへども終に眞の金玉にあらざる事を知る也。謀り多き世界の偽り悉くかくの如し。去ば高位高官に進み初めは衣冠正しくして樂みの姿を現はすといへども終には我慢偏執を懷き人に超へたきとの妬み故に身心を惱まし果には其身を失ふ者也。又淫亂の上をいふに初めは戀慕の執心に引れて其寵愛に耽るといへども末には多くの障りを求めて災更に堪がたき者也。或は他人の妻を犯して自他ともに身をあやまち其名を汚し恥を曝すのみ也。又は武藝に達し朝恩に誇るを以て世界の榮花を樂む人ありといへども終には只蜜の中に毒藥を交へたる如く又は美しき文ある毒蛇に異ならずして初めは甘く覺ゆるといへども果には辛き苦しみと變ずる者也。其故は追従へつらひ色をよくして



人を付り悦びを以て悲ませ一ツを與へ百をとりはなして落す者也

爰にをひて如何に兄弟世界の有様皆以て如此と觀ぜよ。僞りの外に現れずといへども益なき樂みは短く辛勞の危きは充滿せり。或學者是を呼で世界は辛勞の器むなしき學校謀り多き市場迷惑の難路泥土の深沼闇を籠たる樓内山賊の中途苦海の逆浪なりと。尙以て云く空しく荒たる畠地荆棘の藪毒蛇の草むら實もなき花園涙の池水辛勞の泉熱氣の狂亂に等き者也と。何れか世界の事毎に僞りなしといふ事あらんや。災は皆以て常住不退也。無功德の辛勞落着なき案堵甲斐なき恐れ空き涙相違する巧み無益の頼敷僞りたる悦び惣て悲みのみ其實を現はす者也。故に現在もいんへるのに異なる事なし。いんへるのは罪の償ひの苦しみと罪より外になき如く世界も又此二ツを充滿する者也。現世にて商所の利潤をなす實といふは是也。正に罪

の償ひを重くする世界なるが故にいんへるのといふに近からずや。是を指て\*さんべるなるど現世はばらいどの頼みなきにをひてはいんへるのと云ふに近しと宣へり。

§四 現世には眞實の安樂といふ事なし。

只拵つとねにのみ備り給ふといふ事

右に顯はす如く世界の榮花は皆以て墓なき事明也。去ば眞實の樂み如意満足の究めといふは拵つとねにのみ見つけ奉るといふ事をよく辨へたらんには深くうき世の妄執に羈さるゝ事あるべからず。故にひいでずを踏へとして眞の如意満足を大方顯はすべき者也。惣じて諸の御作の物を見るに生得の道に應じてそれ〴〵の究めに至らざれば其不足あるが故に常にやむ隙なくして更に案堵する事なし。然るに今



人の究めとするは何事ぞといへば即眞の拵にて在ます也。拵は人の本源又究めにて在ませば只御一體の拵のみ人の果報の窮めにて在ます也。去ば拵を閑き奉りて別に人の窮めといふ事なき者也。喩へば鞘は刀の爲なり決捨は手の爲なるが故に會て余の役に立ざるが如く人は拵の御爲に作り給へば其極めに至らずんば會て安堵の思ひに住するといふ事なし。拵に至り來る時は萬事の上にやすみ拵に至り奉らざれば誠に不如意貧窮也

去ば天下の主といふとも人の相手の極めにて在ます拵御一體の外には如意満足といふ事あるべからず。\*ぶるたるこの記録に見ゆるごとく或武士次第に身を立て官位を極め終に國王の位となり久しき所願をかなゆるといへども尙飽足る心なくして歎きていはくわれあるほどの位を経上り終に帝位を踏といへども尙満足の心なしと。是

別に非ず。究竟の源にて在ます拵に到り奉るより外は案堵の思ひに住するといふ事なしと辨へさせ給はんが爲也。尙よく是を知らんと思はゞ磁石の針を吸ふを見よ。生得彼石は北に向ふ精力を作りつけ給へばいづくにむくるといふとも北へ向はざれば全くめぐり止む事なく北に向ふとともに謔る如く人も拵に趣き奉らず其源に逢ひ奉らぬ間は更に案堵する事なし。拵に思ひ付奉る程其極めに近く拵を持奉る人より外に如意満足を窮むる者なし。故に善人は現世にをひて拵に近付給ふ事世に超へ人に超へ給ふが故に如意満足も又人に超へ給ふ者也

然るに人の極めといふは色體に非ず身の樂みにも非ず只眼にかゝらぬあにまの吉祥にあり。それに依て善人は世界の帝王も又前代にも後代の人にも曾つてあるまじき無事と悦びとを持給ふ者也。但汝



は<sup>ヲ</sup>の御親みの持給ふ樂みよりも世界の主君の樂みは尙勝れりと思ふや。如此の問答を聞給ひし人々は忽ち<sup>ヲ</sup>の甘味を試み現世の位を捨財寶をなげうち右に顯はす内證の二様の樂みをもに試み給ふ事如何計の事とか思ふや。同く\*さんげれこうりよばつばも汝に向て是を答へ給ふべき者也。其故はばつばの御跡をつがせ申べしと諸人仰ぎ奉りし時千萬御辭退在ましゝかども終に御位につけ奉りて後偏に流人の故郷を慕ふごとく御出家ありし時の古き栖を常に御涙とともに戀ひ給ふと也

§五 古きためしを以て右の道理  
を極むる事

去ば現世にて達する事叶はざる樂みを求めんとする迷ひの甚深き

事を明めんが爲に今一つの道理をきけ。惣じて物の達するといふは只一ツも缺けたる事なく萬事に達せずんばあるべからず。皆人の知れるが如く極りたる樂みに至らんが爲には如意満足の位を極め萬事に休息なくして叶はず。少なりとも心に任せぬ事あるにをひては千々の悦びも何の益ぞ。古より今に至るまでいくばくの人か官位俸祿身に餘り思ひのまゝに振舞といへども未だ一ツの望み達せざるに依て千萬の好事も甲斐なく悲みの底に沈みたる事あり。萬事を持たる計りにても未達するといふ事なし。萬事の望みを打やめて心易く何たる思ひもなく安堵に住するこそ樂みなれ如何なる天子將軍なりといふとも老病死苦を初めとして衆苦充滿の世界なれば争か樂みを極むるといふ事あらんや。それ安樂の極めといふは只<sup>ヲ</sup>御一體にて在ます也。若現世にて是を試みしる事あらば<sup>ヲ</sup>を持奉り深く御大切に



存ずる人より外になしと心得べし

汝此等の道理を以ても尙未口を閉る事なく證據を見んと思はゞ類ひなく現世の榮花を極め給ひし智惠第一の\*さらもん大帝王に向て。世界のあだなる榮花の中に如意満足の極めありや否やを問奉れ。然らばあだなる事のあだなる事は皆あだなりと答へ給ふより外あるべからず。是を御身試み給ひての御言葉なれば更に疑ふ所なし。誰かさらもん帝王に勝て古へより今に至るまで上智賢才の名をあげ萬寶に飽足り給ふ帝王別によりや。世界の榮花を一身に極め歌舞音樂の興を盡し女御更衣を先として宮女の數を連ね給ひ花を莊り玉をしき金銀珠玉は石瓦の如く富貴榮耀ふうきさうりょうの數を盡し給ふといへどもそれを御身に試み給ひてうきよの榮花は皆空きと宣ふ也。然るに今汝何を試みんとするぞ。\*さらもん帝王の求め給はざる事を求めんと歎く事

勿れ。其故は別に尋ぬべき世界なし。\*さらもん帝王の持給ふ事に勝りて別に求むる事何かあらんや。悉く世界の實をかり束ねて掌に握り給ひし御身さへ皆實もなきことなりと宣ふ時は争か汝落穂を拾ひて其樂しみを極めんとはするぞ。大智發明の\*さらもんさへ御生涯の間榮花に身をなし給ふが故に罪におち給ふと\*さんぜらうにも宣ふと見へたり。今汝其跡をしたはんとするは何事ぞ。人は辭の道理よりも誠に試み知りたる事を猶明かに信ずる如く\*さらもん帝王御身に試み給ひて世界の榮花は悉く空しく實もなき事也と宣ふ御辭をもて諸人の證據となし給ふ者也。拵まがは一人の例しをもて萬民の歎きを救ひ一人の迷ひを明め給ふをもて諸人を導き給ふ者也

爰に又さるも四に如何に人の子どもいつまで心を起さずして何ぞ空き事をしたひ偽りを尋ぬるぞと叫び給ふ事をきけ。誠なる哉ぼろ



へたの御辭。是世界の空き事計りなるにをひては責ての事なれども、尙淺間敷事といふは皆偽りたる假の質をもて付る者也。\*さらもんの宜く皆紅顔の麗しき偽り也。紅粉の彩りは空しき也と。是誠に空しきのみにして偽りなきにをひては責ての事なれども顯れたる實もなき事よりも隠れたる實もなき事は尙大なる災なり。去ば世界は名聞人のごとしと觀ぜよ。名聞人はわが身の惡を隠して善人と見へんと歎くごとく世界の榮花も隠れたる不如意を莊りて満足の身と見する者也。汝此等の人に近付其脉をとり試むるにをひては外の診脉に替りて内證に病ありといふ事を見付べき者也。詠めやる遠方のけいは草々の緑の色あざやかに見するといへども手に取る時は匂ひあしく鼻を穿つことあるごとく世界の榮花もはるかに詠めやる時は如意満足の粧を顯はすといへども内證に近付ては皆そらめなりといふ事

を辨ふべし。去ば拵の御寫なるあにまは、まじの御血にかへて自由をうけあなじよの友となり奉る身を持ながら何ぞ今生後生ともに眞の寛きをもとめずして偽り多き榮花に住すべきとは思ふぞ。あなじよの高き飯臺を退け畜類の賤き食を求めんとは歎くぞ。甚愚痴の至ならずや。ばらいぞの悦びにかへて争か世界の墓なき事を求めんとは歎くぞ。毎日世界に顯はるゝ難儀辛勞を試みながらそれを離れんと歎かざるは眞に我と身をからむる進退に非ずや。右條々の道理を以て人の歡喜快樂の位は現世にては更に求めうる事なく只御一體の拵にのみ見付奉るといふ事明なれば何ぞあだなる世界を離れず拵を尋ね奉るまじきとはするぞ。\*さんとあぐすちによの宜ふ如くあるほどの海陸を心のまゝに廻りたりとも拵に歸り奉らぬにをひては何方にむかふといふとも不如意貧賤たるべき者也



第十 嗔恚に對する了簡の事

嗔恚といふは我に背けると思ふ人に對して妄りに遺恨を挿み鬱憤を散ぜんとする事也。此科の病に對する良藥として\*あぼすとろゑへど四ツに汝等が中より嗔り憎心惡口諍ひ惡心等を退けよ。柔和哀憐を本として我等を赦し給ふ御主きりすとに對し奉りて互ひに赦しあへと宣ふ者也。又\*さんまてうすをもて兄弟に對して嗔りを爲すべき輩はじゆいその時御糺明なくして叶ふべからずと宣ふ也

一ツ茲に觀ずべき事あり。諸の鳥類畜類は生れ付より敵を防ぐ道具を帶する者也。或は角をもち或は針をもち或は蹄をもち又はあぶ蜂あぶ嘍蚊けむの類までも人を喰ひ血をあやすくちばしを持といへども人は生れ付より互に無事を保つべき爲に他に仇を爲す道具を持事なく御

作者よりあかの裸に作り給ふ者也。然るに仇を爲すべき事を企て憤りを散ぜん爲に身に持ざる刀杖を求め恚りの火を燃す事生得の道に如何ほど違ひたるぞといふ事を觀ぜよ

二ツには他に不會し憤りを散ぜんとする事偏に荒き獸の類なりと心得よ。偏に龍虎獅子王の荒き事を學びて汝が貴き仁の位を失ふ者也。\*ゑりあのゝ記録に見ゆるは或時獅子王狩人より疵を蒙りて逃たる事あり。一年過後其國の\*じゆうばと申帝王の御狩の時件の獅子に疵を付たる人供奉し奉りければ忽ち彼獅子王是を見つけ狩場に群りゐたる人數の中をかけ破り彼人に向ふといへども萬民防ぐによしなくして終に彼人をかみ殺し散々に引裂しと見へたり。誠に憤の深き人は此畜類に異ならず。智慧を持たる人間の身として恚りを治むる心のなきには非ずといへども只身の嗔恚に引れて畜類と等く



なり。あなじよに異ならざるあにまを打捨て、淺間敷進退となる事如何程の無道なる者とか思ふや。

爰に人に依て云べきは、嗔りの焰の盛なる時は、更に是を治め難しと。汝よく觀ぜよ御主（筆字と）。汝が爲に爲し給ふほどの御事如何計の事とか思ふや。汝が堪へ難しとする嗔恚の苦しみよりも、尙限りなき御苦患を凌ぎ給はずや。御敵に對して御血を流し給ふにあらずや。然るに汝今又科を以て、日々に御敵の行ひをなし、御恩を仇にて報じ奉るといへども、御柔和の御上より御憐みをたれ給ふのみならず、御身に立歸り奉る時は、又量りなき御慈悲を以て汝を請取給ふ者也。汝は敵の科に對して、（ヨシキ）閣（しそく）べき謂れなしと思ふや。然らば（筆字）汝が科を何たる謂れありてか御赦しなさると思ふや。身の上には御慈悲を希ひ奉り、他人に對しては私の憤りを散せんとするや。相手に對しては赦すべき道

理なしといふとも、尊き御教の道を以て汝が方よりは赦すべき道是多しと思ひ、別して御主（筆字）に對し奉りて、（ヨシキ）閣（しそく）べき事肝要なりと思へ。

三ツには汝が憤りを散せんとする間は、（筆字）汝も又汝が修善の捧げ物を曾て御納受なさるゝ事あるべからず。故に\*さんまてうす五ヶ條に見へたる如く、兄弟に背く事ありと知らば、先行て入魂して、其後に捧げ物を奉れと宣ふ者也。爰をもて他人と中を違ふ事大なる逆罪なりと聞へたり。入魂せぬ間には、（筆字）汝へ御中を違ひ奉る同前なるが故に、汝が諸行皆以て御主の御内證に叶ひ奉る事あるべからず。是を指て\*さんげれでうりよ、柔和をもて人の科を堪へずんば、我等が善根一ツとして徳となる事あるべからずと宣ふ也。

四ツには、汝が敵は誰ぞと云事を觀ぜよ。必善者か悪人かなるべし。善人を敵とするにをひては、（筆字）汝の御親みにて在ます善人を敵として憎



む事大きなる身の仇也。縦ひ又善人ならずといふとも他よりかけし恥辱を妄りに報せんとする事私檢斷なるがゆへに他の科を罰するに非ずして却て其身に非道の罪を行ふ者也。加之汝は彼に報せんとし彼又汝に報せんとするにをひては此等の敵對浮世にたゆる事あるべからず。\*さんばうろ此道に勝て運を開くべき道を教へ給ひてらまのす一に只善を以て惡にかてと也。是即人よりしかくべき仇をば恩をもて報ぜよとの儀也。幾度か汝が上に人の科を科にて報じ一度も負けじとするが故に却て拙く負るのみ也。それといふは我身の妄りなる憤りに取伏られて悲りの心に負る者也。誠に是に勝べき道は大なる城を責落すよりも尙其力入る事也。我身の憤りを治め法度に隨ひ嗔恚の猛火を消す事は城を責落すよりも尙強き利運也。是を隨へ治めずんば甚しき敵となりて汝をいつも責伏べし。痛ましき哉智

惠の眼つぶれて此惡に募るといへども更に辨る事なし。其故は人として憤を散ぜんが爲に他の科を報ずるに其謂れありと思ひ嗔恚の計を以て其身をさし惱ますといへども覺ゆる事なく憲法の道と心得惡に善の彩をして付る也

去ば此惡に對して勝べき料簡といふは妄りに我身を思ひ過す大切の根を截るべし。邪なる心の根に斧を下さぬにをひては人の讒ワツカなる惡言を以ても嗔恚の煽に焼かるべき者也。汝生得の恚り深しと知らば萬事に付て妨の來らざる以前に兼て其覺悟を爲すべき事あり。用心深きを以て敵のやじりを防ぐ事安し。此覺悟をして汝が心に一つの事を定めよ。是則嗔りの心燃立べき時先無言して心を治めよ。縦ひ萬事に道理を持といふとも汝が心を信ずべからず。爲さずして叶はざる事ありといふとも嗔りの煽の消へんまではする事勿れ。暫く



心を静めばあてるなうすてる一卷誦問なりとも待べし。\*ぶるたるこの記録に或帝王心に叶ひたると思給ふ臣下あり。官位を上表して罷り退く時帝王へ一ツの諫めをなして申さく君もし逆鱗あらん時何事にてもあれ宜ひ出さるべしと思召事あらば必いろはを一返唱へ給ひて論言を出し給へと奏して去りぬと也。是別にあらず恚りの心に起る時智慧の眼も塞りて賢き人も愚人となるといふ事を知らしめんが爲也。去ば事を定め行ふべき爲に第一の悪き時分といふは恚りの心起る時なりといへども人として必瞋恚の心燃る時早く行ひ早く定めたく望む者也。故に此砌深く用心すべき事也。酒に酔たる人は本心を失ふが故に妄りに事を爲すを以て大なる後悔の基となる也。その如く瞋恚の煽胸に餘れば忽ち智慧の眼くもり是非を辨へずして今日なしたる事よきと思ひしは明日は大に悪くすまじき物と思ふ

事あるべし。誠に酒と好色と瞋恚の三ツに勝りて人を迷はす物なし。其に依てゑければやすちこ十九に・Vinum, et mulieres apostataro faciunt sapientes. Ecclesiast. 19 酒と女は智者の分別を迷はすと宜ふ也。是酒のみにも限らず。何れの妄りなる望も智者を迷はする者也。又汝に瞋恚の心のをこるにをひては忽ちそれを掃はん爲に余の事を心に思へ。其故はもゆる火の薪を引取れば其火忽ち消果る者也。憤りを散ずる事叶はぬ人に對しては尙大切に思ふべき事を歎く事又よき堪忍の便也。其故は大切なき堪忍は遺恨と成替る事多し。又他人の嘖りより退く事自他ともに尤よき堪忍の便也。其故は人の憤りを退くにをひては其人にも嘖りを止させ我も嘖りを起さぬ也。もし又退き難き事ありて返事をするといふとも如何にも柔かに答へよ。和なる言葉は瞋恚を碎き荒けなき辭は恚りを起すと\*さらもんも宜ふ也。



## 第十一 ほるたれざといふ強き心の事

去ばほるたれざの善と云ば強き心は善の障りとなるほどの事を打ち切り如何程の妨ありといふともそれに拘らずしてたやす先へ行く事を爲す善也。學者のいへる如く善は難行なれば是を勤めうる爲に常に強き心を伴はずして叶はず。鐵石は堅き物なるが故にそれを和ぐる爲には鎚を添へずして叶はず。又敵陣の中を通らんとする者は兵具を帶せずして叶はざる如く善のかなづち兵具となる強き心なくんば難行なる善を和げ妨を防ぐこと叶ふべからず。汝言へ何れの善か難からずといふ事ありや。諸の善の上をよく見よ。或は天狗或は世界或は私の大切より妨ずといふ事なし。然るに強き心の善なくして望み計りを以ては争か求め得る事叶ふべきや。是を持ざる時は其外の善

は手足を弱められたる者の所作をする事叶はざるが如し。故に汝善事の徳を求めんと思はゞ天狗世界色身より爲す所の妨にかち眞の道に至るべき具足となる強き心を持たずして利運を開く事叶はざれば常に此兵具を手より放つ事勿れ。去ば右の強き心の善を持ざる人は求めんとする善を得べからずとよく心得よ。汝の心を改めざる内にはそれを見付る事叶ふべからず。甘露は辛苦をもて求め冠は合戦を以て戴き悦びは悲みより求めたまの御大切は身を接するを以て求むる者也。故に貴き經文に解怠無所作をしばく諫め強き心と誠精を盡す事を大に挑げ給ひて善の道に解怠無性はたま大なる妨となり強き心は大なる便となる事をたまより知らせ給ふ者也

## §一 ほるたれざといふ強き心の善を求むる道の事



此強き心の善といふも余善に齊く求め難き善なれば如何にしてか  
求むべきぞといふに先其價諸の財にも越へ珠玉にも勝りたりと思へ。  
其故は善の寶を求むる便となるは其價の高き事を見知る事也。世界  
の人の善より退く事は解怠臆病にして難き所を逃るゝにあらずや。  
然るに強き心の善を以て此難儀に勝にをひては則天の國をとるべき  
事疑ひなし。是に付て御主の御辭に *Regnum caelorum vinu patitur, et vino  
leni rapiunt illud. Mat. 11* 天の國は強精なる者押へてそれを奪ひ取ると  
宜ふ也。故に善に強き者より外に此國に至る事なし。然ば此善を求  
むる今一ツの便と云は善人達の鏡を見る事也。いくばくの人か世を  
厭ひ身を接し古郷を去り山林に分入樹下石上の栖居をなし其身にか  
へて他人のあにまの扶かりを歎き萬事不如意を本とし給ふ事。是皆強  
き心の善を帶し給ふにあらずや。

右の鏡をもても未達せずと思ふにをひてはまるちれすの鏡を見よ。  
ゑけれじやよりは日としてまるちれすの上を顯し給はずといふ事な  
し。是欽め給はんとこの事のみならず我等に明鏡を顯し其道を學ばせ  
んが爲也。然るに貴きまるちれすの御身といふも今の我等が色身に  
替り給ふ事なし。まるちれすに御力をそへ給ふ材も今更替り給はず。  
人々の眼をかけ奉る天の快樂も古今かはる事なしといへども如此の  
人々は永き世の命を保ち給はん爲にかほどの辛苦を堪へ給へば是を  
鑑みて我等も天の壽命を保つ爲に争か骨肉の邪なる望みを捨まじさ  
や。善人達深き飢渴を堪へ給へば争か汝一日のぜじゆんを爲すまじ  
きや。くるすの上に打付られ給へどもあらしよを止め給はざるに争  
か汝膝を立て片時のあらしよを爲すまじきや。御身命を惜み給はず。  
惡人どもより害を爲し奉る事をも輒くうけ堪へ給ふに争か汝の妄り



なる望みを截らざらんや。肉村をば熊手にてかきさかれ給ふに争か  
汝御主きりとに對し奉りて少の行體をすまじきや。多くの善人籠の内  
に年月を送り給ふに汝争か暫時の閑居を爲すまじきや。如此の明鏡  
を以て未足ぬせざるにをひては貴きくるすに眼をかけ汝が爲に荒け  
なき苦患を凌ぎ給ふ御方は誰にて在ますぞといふ事を見よ。是に付  
て\*さんばうるゑべれよ十二に汝等辛勞に勞れざらんが爲に惡人よ  
り莫太の苦患をうけ給ふ御方を見奉れと宜ふ也。誠に此御鏡といふ  
はいづくに向て見奉るといふ共不可思議微妙に在ますべし。御辛苦  
を見奉れば是に勝りたる苦患なし。又是を堪へ給ふ御方を見奉れば  
是に勝り給ふ方も別になし。又其御苦しみの謂れをいはゞ御身の御  
科一微塵も在ますれば他より勧められ給ひて受給ふにも非ず只御  
自由の御上より我等を扶け給はんが爲に量りなき御大切と御憐みを

以て堪へ給ふ者也。而も御あにま御色身にうけ給ふ御苦しみは諸の  
まるちれすの苦しみを一ツにしても未だ及び奉らず。誠に其時に當  
ては天も驚き地も震ひ岩石も碎け心なき萬像も悲み奉る程也。何ぞ  
人として心なき天地の悲しみにも劣るべきや。争か是ほど照し給ふ  
御鏡に向て少なりとも學び奉らんとは歎かざるぞ。御主きりと世界に  
天降り給ふ事は我等を天に導き給はんが爲也。其行くべき道といふ  
は即くるすなれば御身先御導師としてそれに掛り給ふ者也。是則主  
人の進むを見て臣下に力をそへんとするが如し。爰を以て御言葉に  
爰きりと苦しみを凌ぎ給ひて御身の御快樂に至り給はん事肝要なりと見  
へたり。加程廣大の御威光の源にて在ます御主御身の御寵愛の臣下  
ともに辛苦の道を通り給ふを見て我身を撫養ひ憍慢を本とし存生の  
限り遊山駝水のみに暮さんと思ふ事恥ても餘りある事也



誠に諸の善人達の御生涯のみならず分て善人の上の善人と欽め奉る御主きりごとの御行跡如此在ます時は何たる御免許を持てか汝は歡喜歡樂の道より天の國に至らんとは思ふぞ。如何に兄弟天の快樂の御友となるべきと思はゞ御辛勞の御友となる事を歎け。ともに御國を保ち奉らんと思はゞともに痛み奉るべし。是皆汝に強き心を勸むる道也。

然るに今茲に御主きりごとの御金言をこの一部の極として書をはるものなり。 *Si quis vult post me venire, abneget semetipsum, et tollat crucem suam et sequatur me. Luce. 9.* わが跡を慕はんと思ふ輩は常に身をすさみ色身の望みに任せず其身のくるすを擔て我を慕へと宣ふ也。去ば天の尊き御師匠にて在ますきりごと御教の束ねとして此御辭を示し給へば是を修善の目宛と用ひ惡を懲し徳を累ねん事を歎かば即達したる善人とな

り内には心の無事を保ち外には常にくるすを擔げ心に甘露を含み競ひ來る辛勞を輒く懷き取るをもて現在より天の快樂をうけ初むべきもの也



## 第十二 けれども並びにひいである

### ちごの事

弟子右の理は拵のちらしよを以てよく頼み奉る様を教へ給へり。  
今又確かに信じ奉る道を教へ給へ

師匠けれどもとそれに籠るひいですの條々を知る事也。今之を教  
ゆべし。けれどもとは。

萬事叶ひ給ひ天地を作り給ふおん親拵とそのおん一人子我等が  
おん主拵を誠に信じ奉る。このおん子すびりつさんとおん奇特をもつ  
て宿され給ひびるぜんまりやより生れ給ふ。ぼんしよびらとが下に  
をひて苛責を受こらへくるすにかけられ死し給ひて御棺に納められ  
給ふ。大地の底へ下り給ひ三日目によみがへり給ふ。天に上り給ひ

萬事叶ひ給ふおん親拵のおん右に備り給ふ。それより生きたる人死  
したる人を糺し給はん爲に天降り給ふべし。すびりつさんとを誠に  
信じ奉る。かとりかにて在ますさんたゑけれじや。さんとす皆通用  
し給ふこと。科のおんゆるし肉身よみがへるべき事終りなき命とを  
誠に信じ奉る。あめん

弟子たゞ今のけれどもは何事ぞ

師匠信じ奉るべきひいですの肝心の條々なり

弟子けれどもは誰人の作り給ふぞや

師匠御主ぬのおぼすとる達すびりつさんとの御導きを以て一緒に  
に集り給ひて御主ぬの御口より直に聞奉られたる旨を連ね給ふも  
の也

弟子何の爲に連ね給ふぞ

けれども並びにひいですのあるちごの事



師匠ひいですに受奉るべき條々我等に教へ給はん爲也  
弟子ひいですとは何事ぞ

師匠ヲ我等に告知らせ給ふ程の事をさんたゑければやより示し給ふ如く堅く信じ奉る様にきりしたんのあにまにヲ與へ下さる人智を  
超へたる御恩の光を輝く善也

弟子ヲ告給ふとは何事ぞや

師匠さんたゑければやより信じ奉れと現し給ふ程の事也。中にも  
けれどもに籠るひいですの條々則これ也

弟子けれどもに籠るひいですの條々は何箇條ぞや

師匠之を連れ給ふあぼすとろ十二人なる如くその數も十二箇條也。  
又これをつぶさに分けて十四の條々に數ゆる事もあり。七ッにはヲ  
の御所に當り又七ッはヲの人にておはしますおん所に當り給ふ也。

然りといへどもこゝにはけれどもを教ゆるが故に十二箇條に積りて  
現はすべし

第一には萬事叶ひ給ひ天地を作り給ふ御親ヲを誠マコトに信じ奉ること

第二その御一人子我等が御主ヲを誠マコトに信じ奉ること

第三この御子すびりつさんとの御奇特を以て宿され給ひびるせん  
まりやより生れ給ふこと

第四ぼんしよびしとが下したにをひて苛責かしやくを受こらへくるすに懸られ  
死し給ひて御棺みかんに納められ給ふこと

第五大地の底へ下り給ひ三日目さんにちによみがへり給ふ事

第六天あまに上り給ひ萬事叶ひ給ふ御親ヲの御右に備はり給ふ事

第七それより生きたる人死したる人を糺し給はん爲に天降り給ふ  
べき事



第八すびりつさんとを誠に信じ奉ること  
第九かとりかにて在ますさんたえけれじやさんとす皆通用し給ふ  
こと

第十科の御許の事

第十一肉身よみがへるべき事

第十二終りなき命を誠に信じ奉ること

弟子最初の箇條に萬事叶ひ給ひ天地を作り給ふ御親おやを誠に信じ  
奉ると申す心を現し給へ

師匠まことのおやは只御一體ごいつたいの外座がわしまさずこれ即ちばあてれとい  
いりよとすびりつさんとと申し奉りてべるぞうなは三ツにて在ませ  
どもすすたんしやと申す御正體はたゞ御一體にて在ます也。これ即  
ち各々おのづかきりしたん信じ奉らで叶はざる事也。ばあてれとは御親ひい

りよとは御子と申し奉る心也。すびりつさんととは御親おやと御子ごこ  
より出給ふ互ひの御大切に在ます也。この最初の箇條には三の  
うち一番のべるぞうなにて在ます御親おやの御事を沙汰し奉る者也  
弟子でし三ツのべるぞうなにて座ましましなから御一體なりと言へる  
理ことわりは分別しがたし

師匠それは尊たつときちりんだあでのみすてりよとて我等がひいのですの  
題目のうちにては極意最上の高き理り也。其故はおやは無量廣大むりやうくわんだいに座  
しまし我等が智慧は纒たづなかに限ある事なれば分別には及ばずたとひ分  
別に及ばずといふともおやにて座まします御主ごしゅ直ちかに示し給ふ上は誠に  
信じ奉らずして叶はざる儀也

弟子此儀をよく分別する爲にそのたとへなしや

師匠たつと警たつとあり。我等があにまはたゞ一體にてありながら三の精根あ

けれいと並びにひいのですのあるちこの事



り。一ツにはめもうりやとて覺へたる事を思出す精二ツにはゑんて  
んぢめんととて善惡を辨へ分別する精三ツにはおんだあでとて善き  
と思ふ事を望み惡きと思ふことを嫌ひ物を愛する精。かくの如くあ  
にまは一體なりといへども三ツの精根ある如く拵御一體にておはし  
ましながらばあてれひいりよすびりつさんと三ツのべるぞうなにて  
おはします也

弟子萬事叶ひ給ひ天地を作り給ふとは何事ぞや。

師匠その言葉の心は拵萬事叶ひ給ふによつて天地萬像を一物なく  
して作り出し給ひ御身の御威光我等が徳の爲にかゝへ納め計らひ給  
ふと申す義也

弟子御主拵一物なくして天地萬像を作り出し給ふとある事を分別  
せず。其故は御作の物は皆拵の御智慧御分別より出し給ふと見ゆる

也。然る時んば一物なくして作り給ふとは何事ぞや

師匠この不審を開く爲に一ツの心得あり。それと言ふは拵の御分  
別のうちには御作の物の體は一ツもなしといへどもそれの諸相  
こもり給ふ也。これをいでやと云ふ也。このいでやといふ諸相は作  
の者にあらずたゞ拵の御體也。然るに萬像を作り給ふ時拵の御分別  
に持給ふいでやに應じて御作の物は御體を分て作り出し給ふには非  
ずたゞ一物なくして作り給ふ也。たとへば大工は家を建てんとする  
時まづその指圖をわが分別の内に持ちそれに應じて家を作るといへ  
ども家は分別の内の指圖の體にはあらずたゞ格別の物也。その如く  
拵御分別の内に持給ふ御作のもののでやに應じて作り給ふといへ  
ども御作の物はそのいでやの體には非ずたゞ萬事叶ひ給ふ御力を以  
て一物なくして作り給ふ也



弟子拵たての御分別に持給ふ指圖に應じて作の物を作り給ふといへども作の物は拵たての御體に非ずたゞ格別の體なりと分別せり。一物なくして作り給ふとは何事ぞや

師匠一物なくして物を作るといふは無かりし物を道具も下地も種もなくして出來しゅらいさする時一物なくして作ると言ふ也。然るに拵たては萬事叶ひ給ふ尊體にて在ませば萬物を作り給はん爲に下地も種も道具もいらずして唯あれと思召すばかりを以て作り給ふが故に一物なくして作り給ふと申す也。譬へば大工は指圖に應じて家を作るといへども材木道具以下ひなくしてあれと思ふ許りを以て作る事叶ふにをひてはその家は誠に一物なくして作りたりと言ふまじきや

弟子拵たて一物なくして萬物を作り給ひ作の物は御體にあらずといふ事は分別せり。拵たての尊體と作の物の體とその差別如何

師匠拵たてと御作の物の差別といふは大きなり。雲泥懸隔といふもなほ餘りあり。その故は拵たてと申し奉るはすびりつあると申す尊體にて始め終り在まらず萬事叶ひ給ひ量りなき御智惠の源諸善萬徳圓滿無際げんの源也。御作の物と云ふは或は色相あり又無色相ありといへども皆その限りあり生滅する事叶ふ也。その精力も智徳も少き也。かるが故に御作者と作の物の差別は量りなき懸隔なり

弟子右拵たてと御作の物の差別は承りぬ。今又御作の物は何れも互ひに一體か別體かといふ事を顯し給へ

師匠御作の物は何れも別體也。其故は拵たてより作り給ふ時夫々に應じたる格別の精を與へ給へば也。その證據には作の物に現はるゝ各隔かの精徳あり。この儀をよく分別すべき爲に心得べき事あり。それと云ふは色相ある萬づの作の物は二ツの根本こんぽんを以て和合したるもの

けれいと並びにひいですのあるちごの事



也。一ツにはまてりやとてその下地の事。二ツにはほるまとてその精これ也。右の下地と云ふは四大を以て和合し現はるゝ色相なり。又ほるまと云ふは萬づの物に性體と精徳を施す者なり。目に見へる御作の物は四大を以て和合したる一ツの下地なれども性體とその精徳を施すほるまは各隔なるに依て皆別體なる物也。かるが故に畜類と四大和合のその下地は一ツなりといへども人の性體と畜類の性體格別なるに依つて別體なる者也。是等の事を委しく分別したく思はゞ別の書に載するが故によく讀誦せよ

弟子その御一人子我等が御主まことを誠まことに信じ奉ると申す心を顯はし給へ

師匠御主まことが御まことにておはしますおん所は御親まことと同じき御性體おん智恵御精まこと力一ツとして變る事なき誠の御一人子にておはしますと

申す心也

弟子が何とやうに御子を生じ給ふぞ

師匠がまことおん子を生じ給ふと聞き奉る時は人間の業の様に卑しき道と思ふべからず。すびりつあるおん體と申して色相を離れ給ふ清淨の御體にて座まことせば也。が御子を生じ給ふ事は廣大無邊のゑんてんぢめんととて量りなき御知力まことを以て生じ給ふ也。この儀は人間のうすき智恵には及ぶ所にあらず

弟子譬を以てこの儀を少々顯はし給へ

師匠及ばずながら一ツの譬を云ふべし。鏡に向ふ時は我影のそれに浮ぶが如く御親が御身の尊體を諸善萬徳ともに達して分別し給へば我身に影の映るが如く御身のゑんてんぢめんとに二番のべるぞうたと申し奉る御子が映し出し給ふ也。然れば御親と御子のべ



るぞうなは各隔にて在ませども尊體はたゞ御一體の<sup>まゝ</sup>に在ます也  
弟子第三の箇條にこの御子すびりつさんとの御奇特を以て宿され  
給ひ<sup>つ</sup>びるぜんまりやより生れ給ふと申す心を顯はし給へ

師匠御親<sup>まご</sup>の眞の御子にて坐します二番の<sup>まご</sup>べるぞうな尊き<sup>たつと</sup>びるぜ  
んまりやの御胎内にをひて我等が肉體に變らざる眞の色身と眞の<sup>まご</sup>  
にまを受合せ給ひて眞の人となり給ふといへども<sup>まご</sup>に座します御  
所は變り給ふ事なくいつも同じき<sup>まご</sup>に座します也。このびるぜん  
さんたまりやより生れ給ふを名付けて<sup>まご</sup>と申し奉る也。またこの  
御出世は人の仕業を以ての事にあらずたゞ御親<sup>まご</sup>と御子<sup>まご</sup>又すびり  
つさんとの御奇特を以てはからひ給ふといへども御大切の御仕業な  
るが故にすびりつさんとの御奇特と申し奉る也。所以如何となれば  
御親<sup>まご</sup>には萬事叶ひ給ふおん所御子<sup>まご</sup>には量りなき御智惠の所をあ

てがひ奉るごとく御大切の御所はすびりつさんとにあてがひ奉る者  
也。すびりつさんとの御奇特を以て計ひ給ふ事なればすびりつさん  
とより宿され給ふと申し奉る也。同じく御母<sup>まご</sup>びるぜんも人間の所作  
を以て御懷妊なされざるが故に御誕生の後も相變らざるびるぜんに  
て座します也

弟子第四の箇條にはぼんしよびらとが下にをひて苛責を受こらへ  
くるすに懸られ死し給ひて御棺に納められ給ふと申す心を顯し給へ  
師匠御主<sup>まご</sup>に座しますおん所は苛責を受こらへ給ふ事叶ひ  
給はずといへども人にて座しますおん所はぼんしよびらとが守護な  
る時代に御自由の上より一切人間の科を送り給はん爲にくるすに懸  
られ死し給ふと申す心なり  
弟子人にておはします所は何とやうに死し給ふぞ



師匠シヤウに當り奉る御所は、おんあにまにも御色身にも離れ給はず。人となり給ふおん所のおんあにまは、御色身に離れ給ふに依て死し給ひ御棺に納められ給ふと申す義也。

弟子シシ御子ミコに人になり給ひ人間の科に對せられてくるすにて死し給ふ事は何の故ぞや。科を許し給ふべき別の道なしや。

師匠様々あるべし。然りといへどもこのくるすの道は數多の道理に依て第一相應の道と選びとり給ふ者也。

弟子その道理を少々示し給へ。

師匠先一ッには我等に對せられて御大切の深く甚しき程を知らしめ給ふを以てシヤウを御大切に存ずる事も深からん爲也。二ッには科の深き事を辨へさせ給ん爲也。その故はシヤウ人となり給ひ死し給ふを以て許し給ふ程の御事なれば也。三ッにはこの御恩の深き所を思案し。

その御禮を爲し奉るべき爲也。其故はシヤウかほどの御苦みをこらへ給はずしてたゞ假染に許し給ふを以ては人々さほど御恩をも見知り奉るまじきに依て也。四ッにはシヤウの御憲法正しく在ます事と文科に當る過怠の深かるべき事を知らしめ給はん爲也。その故は御主ミヌまことのシヤウの御子にて在ませば毛頭ほどの御科も在まさずしてたゞ我等が科を御身の上に受かゝり給ひ種々様々の苛責の思案を盡して御身に受こらへ給へば也。五ッには天狗は善惡を辨へさする木實キノミを服ユクさするを以て我等が先祖を付りすまし又あだん一人の科を以て一切人間をわが進退シんたいになしたる如く今御一人イモトくるすの木に懸り給ふを以て天魔は利を失ひその上御子ミコに體を御身に受合せ給ふを以て一切人間をかカの天狗の手より取放し給ひ自由解脱の身と爲し給はん爲に御主ミヌかくの如くなり給ふ事尤相應の道也。彼と是との道理

けれいと並びにひいのですのあるちこの事



に依て<sup>すま</sup>辨の御子我等に對し給ひて人となり死し給はんとの御内證にて座しませし者也

弟子第五の箇條に大地の底へ下り給ひ三日目によみがへり給ふと申す心を顯し給へ

師匠御主<sup>まがき</sup> 歎<sup>なげ</sup> くるすにて死し給へばおんあにまは大地の底へ降り給ふ也。御主の御上天<sup>ごじやうてん</sup>までは昔の善人達上天せらるゝ事叶はざるが故に大地の底にをひてその御出世を待奉られし人々を召上給はんが爲にかの所に下り給ひて善人達のあにまをそれより召出し給ふ者也。弟子御主<sup>まがき</sup> 歎<sup>なげ</sup> の御あにまの下り給ふ大地の底といふは何たる所ぞや師匠大地の底に四様の所あり。第一の深き底はいんへるのと云ひて天狗を始めとしてもるたる科を以て死したる罪人等の居る所也。二ッには少しその上にぶるがとよりよとてがらさを離れずして死す

る人のあにま現世<sup>げんぜ</sup>にて果たさざる科送りの償ひをしてそれよりばらいぞの快樂に至るべき爲にその間こめおかるゝ所也。三ッにはぶるがとよりよの上りにんぼとてばうちいずもを受けずして未だもるたる科に落つる分別のなき内に死する童の至る所なり。四ッにはこのりんぼの上にあぶらはんのせよといふ所あり。この所に古への善人達御出世を待ち居られたる所に御主<sup>まがき</sup> 歎<sup>なげ</sup> 下り給ひかのさんと達のあにまをこの所より召上げ給ふ也

弟子三日目によみがへり給ふとは何事ぞ

師匠<sup>まがき</sup> せすたへりやに御主<sup>まがき</sup> 歎<sup>なげ</sup> 死し給ふ時尊き御あにま御色身を離れ給ひ次のどみんごに御あにまは御棺に納められ給ふ御死骸に入給ふを以て並びなき御威光のかゝやきよみがへり給ひ數多の御弟子に見へ給ふと云へる事もこの箇條に現はるゝ也



弟子第六の箇條に天に上り給ひ萬事叶ひ給ふ御親拵の御右に備はり給ふと申す心を顯はし給へ

師匠御主まへうぢ ぬよみがへり給ひて後天に上り給へば人にて在ますおん所は御主拵より諸々のべやと達の快樂を一ツにしたるよりもなほ並びなき快樂萬徳を與へ給ふと申す儀也

弟子何とて御右に住し給ふとは申し奉るぞ。拵にも御右左と申すことありや

師匠御主拵御色相備はり給はねば御左右と申す事は無けれども御主まへうぢ 人にて座します御所に與へ給ふ御位は諸々のあんどよ諸々のべやとの位よりも遙かに超へて與へ給ふによつて右を高上と用ひるが故にかく申し奉る也

弟子第七の箇條に生きたる人死したる人を糺し給はん爲に天降り

給ふべきと申す心を顯し給へ

師匠御主まへうぢ 世界の終りじゆいぞの日一切人間の所作を御糺明なされそれこれに應じて不退の御返報を與へ給はん爲に拵にて座します御所は申すに及ばず人にて座します御所も並びなき御威光を現し給ひて天降り給ふべしと申す儀也

弟子第八の箇條にすびりつさんとを眞に信じ奉ると申す心を顯し給へ

師匠この箇條には尊きちりんだあでの三番のべるどうなにて在ますすびりつさんとの御事を現し給ふ者也。このすびりつさんとは御親拵と御子拵より出給ふ互の御大切にて在ます也。このすびりつさんとのべるどうなは御親拵のべるどうなと御子拵のべるどうなと各隔にて在ませども尊體は御親拵と御子拵とすびりつさんとたと御一



體の拵たてまにて在ます也

弟子第九の箇條にかとりかにて在ますさんたゑければじやさんとす皆通用し給ふと申す心を現し給へ

師匠この箇條に二ツの事を示し給ふ也。一ツにはかとりかにて在ますさんたゑければじやの御事。二ツにはさんと達通用し給ふこと是也。

弟子かとりかにて在ますさんたゑければじやとは何事ぞや

師匠ゑければじやとはまじやとを信じ奉り共に御教を相傳し顯し奉る諸々のきりしたんの群衆ぐんじゆを名付る名也。このきりしたんの一昧世界諸國に分れるといへども教といひです一ツなるが故に一ツのゑければじやかとりかに當るに依て一味に譬ゆる也。その番ひはきりしたん一人づゝにて頭かしらはろうまの尊きばつばにて座まはします也。又このゑけ

れじやをかとりかと申す心はすべて世界のきりしたんを一ツにしていふところなり。このゑければじやは御主拵ごしよの宜ふ如くすびりつさんと治め給ふが故にさんたとも名付け奉る也。すびりつさんと迷ひ給ふことましまさぬ如くこのゑければじやも迷ひ給ふこと叶ひ給はざる也。

弟子さんと達通用し給ふとある心は何事ぞや

師匠これを納得なとくの爲に一ツの譬を云ふべし。五體の番ひは互ひに力を得色身の血氣を全身にくばる如く一切のきりしたん一味のところは一身の心なればゑければじやの番ひとなり奉るが故に互ひのひいですさからめんと善事善行等ぜんじぜんぎやうの功力みな通用ありといふ心なり。又天に座しますさんと達のぶるがとうりよの人衆じんじゆもこのゑければじやの番ひなりし人なればこれにも通用ありと申奉る心也。その故は御主



及びまじりにべやと達その御取合せのあらしよとその功力を我等に施し給ひ又我等があらしよとぶらひの功力等をもぶるがとうりよのあにまの爲に御主おんぬしへ手向奉る故也

弟子第十の箇條に科の御ゆるしとある心を顯し給へ

師匠ばうちいずもとべにてんしやのさからめんとを以てがらさを與へ給ひ科を許し給ふに依て科の御許しは眞實さんたゑけれじやにのみありと申す儀也。かるが故に科に落るといふとも頼母たのもし敷を失ふこと勿れ。何時なりともこんひさんを申しまことの後悔を爲すにをひては許し給ふべきこと疑ひなし

弟子第十一の箇條に肉身よみがへるべきとの心を現し給へ

師匠世界の終じゆいぞの日一切人間のあにまいんへるのに落ぬたるもばらいぞに在ますべやと達も残らずもとの身によみがへりわが

爲したる善に依てあにまに蒙るばらいぞの快樂を現世げんぜにて善事ぜんじの合力となりたる色身もともに受け又いんへるのに落ちたるあにまの苦しみも科の合力となりたる色體ともに受くべしといふ義也

弟子灰埃はいぼりとなりたる色身よみがへるべきことは何と叶ふべきや。

師匠萬事叶ひ給ふ御主おんぬしの御所作なれば叶ひ給はずといふ事なし。その故は一物なくしてさへ天地萬像を在らせ給へばいかに況んや下地ある人間の色身たとひ灰埃はいぼりとなりぬたりと云ふともいかでかよみがへし給はざるや。これらの證據日々目の前に現はるゝ物也。地に落ちたる五穀の種は腐るといへども元の實を生ずるもの也

弟子十二の箇條に終りなき生命いのちをまことに信じ奉ると申す心を顯はし給へ

師匠じゆいぞぜらるの日よみがへるべき一切の人間その後は再び



死することあるまじきといふ事也。但し善人悪人の模様その進退雲泥かはるべき也。その故は御主（まこと）を見知り奉らざる者とあしききりしたんとは終りなくいんへのの苦みをうけて長らへがらさに離れずして終りたるきりしたんは天にをひて樂みを極め不退の生命（いのち）を持つべしといへる儀也。右條々は御主（まこと）より告知らせ給ふに依て信ぜずして叶はざる儀也。其故は眼を以て見る事よりもこのひいですの條々なほ以て確かなる事なれば也

弟子（ていし）より告給ふといふ事は誰人（たれびと）の傳へぞや。

師匠（しせう）眞の（まこと）杖（え）にて在ます御主（まこと）を始めとしてすびりつさんとより導かれ給ふさんたゑけれじやより斯の如く教へ給ふ也。このさんたゑけれじやはすびりつさんとよりをさめられ給ふことなれば迷ひ給ふこと少しも叶はざる者也

### 第十三 杖の御掟十のまだめんとすの事

弟子右にははやよく達して杖（え）へ物を乞奉り信じ奉る爲に肝要なる儀を顯し給ひし也。今また善を勉むる道を教へ給へ

師匠保つ爲に杖（え）の御掟（おんおきて）のまだめんとさんたゑけれじやのまだめんとを知り同じく斥くべき爲にはもるたる科を知る事専ら也

弟（てい）杖（え）の御掟（おんおきて）のまだめんとすとは何事ぞや

師（し）萬民（ばんみん）これを保つべき爲におん主（おんしゅ）杖（え）よりぢきの授け給ふ御掟（おんおきて）條々なれば也。まだめんととは御掟（おんおきて）の事也

弟（てい）御掟（おんおきて）のまだめんとは何箇條ありや

師（し）十箇條あり。是即ち二ツに分る也。始めの三箇條は御主（まこと）杖（え）に對し奉りて勉むべき道を教へ今七箇條は人に對しての道を教ゆる者也

でうまの御掟十のまだめんとすの事



御掟のまだめんとす

第一御一體の掟を敬ひ尊み奉るべし

第二掟の尊き御名にかけて虚しき誓すべからず

第三御祝日を勤め守るべし

第四父母に孝行すべし

第五人を殺すべからず

第六邪淫を犯すべからず

第七偷盗すべからず

第八人に讒言を懸くべからず

第九他の妻を戀すべからず

第十他物を猥に望むべからず

右この十箇條は凡て二箇條に極る也。一ツには御一體の掟を萬事

に超へて大切に存じ奉るべき事。三ツには我身の如くぶろしもを思へといふ事これ也

弟第一のまだめんとをば何と様に勤むべきや

師まことの掟御一體を拜み奉り御奉公をぬきんで我等が御合力と御返報を頼母敷待奉り我等が吉事の源にて座しませば是等の事を頼み奉るべし。又御作の物を掟の如く敬はざるを以てこのまだめんとを保つ者也

弟びるせんさんたまりや又その外のべやと達をば何と様に拜み奉るべきや

師掟の如くには拜し奉らずたゞ掟のがらさを以て現世にて善行を勤め給ひ奇特なる御所作を爲されたる御人なれば今掟の御内證に叶ひ給ふに依て我等が御取なしてと用ひ拜み奉るべし

でらすの御掟十のまだめんとすの事







師これを守るに二ツの事あり。一ツにはどみんどと云ければやより觸れ給ふ祝日に諸職をやむる事也。但し免れぬ仔細ある時は所作をして科にならざる事也。二ツには加様の日は一座のみいさを始めより終りまで拜み申す事也。是も煩ひか尤もなる仔細ある時は拜まずしても科にはあらず。これらの仔細は以後云ければ五ツのまだめんとのうちには顯すべければそれをよく見べし

弟第四のまだめんとをば何と守るべきや

師親によく従ひ孝行をいたし敬ひを爲し要ある時は力をそゆる事。又人の下人たる者は其身の主人其外司たる人々に従ふにゆるかせなきを以てこのまだめんとを守る也

弟父母主人司たる人より科となる事をせよと云付られん時も従ふべきや

師親主人司たる人によく従へといふ事は科にならざる事を言はれん時の事也。折の御掟を背き奉れと言はれん時の事にはあらず

弟第五のまだめんとをば何と守るべきや

師人に對してあたをなさず害せず傷をつけず是等の惡事を人の上に望まず喜ばざるを以て保つ者也。所以者何人は皆折の御寫に作り給へば也

弟人にあたを爲し折檻し又は害すること叶はずと警め給ふにをひては國家を治むる道は如何あるべきや

師この御掟の箇條を以てすぐなる題目ありとても弓矢を取るべからず又は檢斷の人より科人を折檻し成敗する事勿れとのいましめには非ず却つて罪人を折檻し成敗する事なくんばその科檢斷にかゝるべきもの也。たゞこの箇條はその役に當らずして無理に人を殺しあ



たを爲すべからずとの儀也

弟主人として被官を成敗する事叶ふまじきや

師我進退する者共の犯したる科を輕重に従ひ似合の折檻を加ゆる事叶ふといへども殺す事は最も深き題目あらん時確かに糺明して人を殺す程の確かなる許しを持たる人なるにをひては苦しからざる儀也

弟最も深き題目と同じく人を殺すほどの確かなる許しとは何事ぞや

師深き題目とは萬づの折檻の中に人の命を果す事は一大事の折檻なれば深き誤りなくして殺すこと最も非道なる事也。又人を殺す程の確かなる許しと言ふは誰にもあれ人を殺す事は道理にはづれ國家の爲にならず只上より確かなる許しある人へのみ當る儀也

弟人の上に悪事を望まざれとは如何なる事ぞ

師人に對して遺恨を含み惡を爲したく思ひ或ひは仲を違ひ言葉を交さぬ事はこのまだめんとを背く儀也

弟第六のまだめんとをば何と保つべきぞ

師言葉所作を以て男女ともに淫亂の科を犯すべからず又は自ら犯す事も同じ科也

弟何とて言葉所作を以てとは宣ふぞ。心に之を望む事も同じき科となるべきや

師心中に望む事も科なれどもそれは第九のまだめんとを破る別の科也

弟このまだめんとを保つ爲の便りとなること如何に

師御主并より夫婦の御定を第一になし給ひ其外あまたの事の中に

でうすの御掟十のまだめんとすの事



食物・飲物をあくまでにせざる事・悪き友と交りを止むる事・戀の歌・戀の草紙を讀まず・戀の謠を謳はず・叶ふにをひては聞かざる事也。なほ肝要なる事と云は、このまだめんとを保つべき爲に御主<sup>おんぬし</sup>へ御力を頼み奉り、又は科に落る頼りとなる事を斥くべき事

弟第七のまだめんとをば何と保つべきや

師他人の財寶を何なりともその主<sup>かみ</sup>の同心なくして取事も止めぬ事もあるべからず。人にもこれらの事をすゝめず、その合力をもせず、その頼りともなるべからず

弟人の物を盗みたく思ふ事はこのまだめんとを破る科に非ずや

師科なれどもそれは第十箇條目のまだめんとを背く別の科也

弟第八のまだめんとは何と保つべきや

師人に讒言を言掛けず、そしらず人の隠れたる科を顯すべからず。

然りといへどもその人の科を引返さすべき心宛にて司たる人に告知らせ申す事は叶ふ也。人の上に邪推せず、虚言<sup>きよごん</sup>は云ふべからず

弟第九のまだめんとをば何と分別いたすべきぞ

師他人の妻を戀せず、其外戀慕に當る事を望む可らず。淫亂の妄念に與せず、又はそれに喜び、執着する事もあるべからず

弟淫亂の念のこる度毎に科となるや

師其儀に非ず、その念を喜ばず、それを捨る時は却つて功力となる者也。若又その念に同心せずといふとも、心に止め喜ぶ時は科となる也

弟第十のまだめんとをば何と心得べきぞ

師他人の財寶をみだりに望むべからず

弟今この十箇條のまだめんとは二ツに極るといへる事を示し給へ。その二ツとは如何なる事ぞ



師萬事に超へて拵を御大切に思奉る事我身を思ふ如くぶろしもとなる人を大切に思ふ事これ也

弟萬事に超へて拵をば何と様に御大切に思ひ奉るべきや

師財寶譽れ父母身命これらの事に對して拵の御掟を背き奉らずしてたゞ一遍に御大切に思奉るに極る也

第拵の御掟を守る爲の頼りは何れぞや

師その頼りは大き也。取分ねやを起上りてよりは拵の御恩を存じ

いだし御禮を申上奉るべし。又其の日御掟を背かずして御内證に従

ひ身を修むる爲に御守りを頼み奉りおらしよを申奉るべし

弟ねさまにも怠らずその分勤むる爲には何事をすべきや

師まづねさまに其日の心と言葉と所作の糺明をし後悔を以て犯せる科の御許しを乞奉り同じくがらさを以て進退を改めんと思定め似

合のおらしよを申上べき事也

弟ぶろしもとなる人をば我身の如くには何と様に思ふべきや

師拵の御掟に従つて我身の爲に望む程の好き事を人に對しても望むべき者也

弟拵の御掟に従つてとは如何なる事ぞ

師之ゝに仔細あり。拵の御掟に背きて人の爲に何事なりとも望む時んば縱我身の爲に望むまじき事なりと云とも我身の如くに人を思ふには非ずたゞ我身を憎む如くに人を憎む事也



第十四 聖句集

收める所は、専らぎやどべかどるの中から選んで、順序を整へたものである。但し上記十三章の本文中にいでたものは再録しない。附録の索引に示した出所に徴して、本章を補ひ得よう。

舊約全書

出埃及記

○我は剛強の主<sup>ミヤ</sup>也。先祖の惡に對して三代四代までは罰し又我を大切に思ひ我掟を保つ者の上には千代に千代を累ねて慈悲を與ふ(二一章ノ五、六節)

申命記

○如何に愚痴狂亂惡逆無道の者ども御主より蒙り奉る數々の御恩の報謝は是也や。汝等が御作者御親にては在まらずや(三二ノ六)

○彼等より我目を放べし。難儀に極るを見ると云とも終に了簡をも加ふべからず(三二ノ二〇)

○御罰の日は近く落着の時も又急也(三二ノ三五)

約書亞書

○<sup>ミヤ</sup>人の聲に隨ひ給ふ(一〇ノ一四)

約百書

○<sup>ミヤ</sup>に背き奉りて誰か案堵の思ひには住すべきぞ(九ノ四)

○如何に御主科の御罰を聞き給はざればわが爲すほどの事に付て恐れ奉る(九ノ二八)

○<sup>ミヤ</sup>は罪人を赦し給はずといふ事を我よく知るが故に爲す程の事に恐れ奉る(九ノ二八)

○如何に御主何とて我より御顔をそばひけ給ふぞ。我を御敵の如く



にし給ふぞ。争か風に靡く木の葉に對して御勢ひを顯し給ひ葉よりも輕き塵埃をせばめ給ふぞ。何とて我を責め給ふべき苦患の數を記しおき給ひ若年の時の科に對して果し給はんとは思召ぞ。我は蟲はむ衣類の類ひ消果べき腐り物の如くなり。わが足を搦め給ひて心身持を細に御覽ぜらるゝは何事ぞ(一三ノ二四―二八)

○女人より生るゝ人は一命の隙短く多くの不如意難艱に身を責め花の如く開くかとすればやがてしほみ影の如く空く更に定りたる事なし。かゝる墓なき人間の行跡に對して御眸りを廻らし玉ひ直に御糺明の御相手となり給ふ也。汚れたる種より堅まりたる者を潔くなし給ふは御身御一體の外に誰か叶ひ奉るべき(一四ノ一―四)

○惡人は若年の時より骨髓に徹りたる惡業とともに棺の中に臥す(二〇ノ一〇)

○おまへの御辭の中に第一小さき御辭なりといふとも輒く聞得奉る事難かるべきに其の時の御威勢廣大に在ます御辭をば如何に聞得奉るべきや(二四ノ一四)

○汝萬の惡を爲すとて御前にをひて何の仇ぞたとひ百善を爲すとても如何なる功德とか受給ふべきぞ(三五ノ六、七)

詩編

○無事に寢て休むべし。其故は御身御主は御慈悲の頼母敷にて在ましわが一命を安堵させ給ふべければ也(四ノ九)

○わが心に惡を犯したるにをひてはおまへわが上を聞給ふべからず。然共犯さればわがあらしよを聞給ふ(六六ノ一八、一九)

○御主わが光明と息災にて在ませば誰をか恐れをのしくべき。御主我命の御守りにて在ませば何者をか恐るべき。敵の諸軍勢われに對



して陣を張り圍みをなし弓箭を起すといふとも御主に頼みをかけ奉るべし(二七ノ一、三)

○善人の少しきは悪人の多き實にも勝る(三七ノ一六)

○我等が拵は拵にて在ます也。其御役と申は人を扶け給ひ死する門より遁し給ふ也。然れども御敵の頭を碎き給ひ惡に屈く者の頭の毛は一筋も残し給ふべからず(六八ノ二〇、二一)

○知らず辨へず常に闇に漂ふが故に闇より闇に移り行く(八二ノ五)

○如何に御主御身の御家の一日は余所の千日の樂みにも勝る(八四ノ一〇)

○善人の上に光出で心直なる人に悦び出来る(九七ノ一一)

○善人の死するは御主の御前に勝れて價高く又惡人の死するは勝れて惡しし(一一六ノ一五)

○遍き世界の財寶を持つて樂む如く御掟を守りそを樂む(一一九ノ一四)

○如何に御主御掟の道は世界悉くの財寶を持つが如く樂み來る(全上)  
○如何に御主御臣下となる我等に御約束の御辭を思召出し給へ。わが頼母敷をそれにつけわが辛勞と氣遣の時もその御力を得て悦び奉る(一一九ノ四九、五〇)

○御手を以て我を作り給へば御法を習ひ奉らんが爲に分別智恵を興へ給へ(一一九ノ七三)

○われ御掟を觀ずるを以て諸の師匠に勝りて知り又そを保ち勵す時は諸の老者功者にも勝りて知る(一一九ノ九九、一〇〇)

○如何に御主御身の恐を以てわが肉を貫き給へ。故はわれ御糺明を恐れたり(一一九ノ一二〇)

○萬の惡を深く憎み嫌ふ(一一九ノ一六三)



○如何に御主御法を保ち奉る者は多くの無事を持也(一一九ノ一六五)  
○世界の大名高家と人の子供に頼みをかくる事勿れ。彼は扶くる力を持たざれば也。終に彼が命は亡びて土に歸るべし。其日にのぞみて彼等に頼みをかけし者の念々悉く空しくなり天地海山萬の物の御作者にて在ます拵たごを御合力の爲され手と持奉りてそれに頼みをかけ奉る人は果報いみじき也(一四六ノ三四五)

箴言はろへることば

○汝等をよぶと云へ共其聲に隨はず救はん爲に手を出すと云へ共見る者なく我教と諫をも賤しむるが故に我汝等が最後を笑ひ汝等が禍の恐來らん時嘲るべし。俄に大風起る如く思はざるに死期來らん時我をよぶべけれども我何事あるべからず。未明におきてわが前に來るといふとも見る事あるべからず。是折檻と教化とを嫌ひて眞の恐

れを持たずわが教へに従はざる故也(一ノ二四—三一)

○汝が眼を常に直なる事にかへ汝が眼に先行くべき道を見せよ(四ノ二五)

○報ひの日は財寶も益なく只善作のみ死するを遁すべし(一一ノ四)

○貧にして富み榮へ富て貧き人あり(二三ノ七)

○堪忍の道を知る人は深き賢慮を以て身を治むる道を知るべし。堪忍を持ぬ者は愚痴なる事なくして叶はず(一四ノ二九)

○御罰の日は財寶も何の益ぞ。只善事のみ死するを遁す(一一ノ四)

○人の行跡は拵たごの御内證に叶ひたる時は怨敵の輩ともに無事を叶ひ給ふべし(一六ノ七)

○知音と中を違はんとする人は常に其かこつけを尋る(一八ノ二)

○物いはずんば愚人も智者と見え口を閉れば賢人と見ゆる也(一七ノ



二八

○買取入の初めは高し〜といへども買得て後は悦びを以て歸る二  
○ノ一四)

○隨ひを保つ人は利運を開くことを語る(二一ノ二八)

○悪人なる女は口狭く深き井の底の如し二三ノ二七)

○清き水は見る人の形をうつす如く智者は外の行ひを見て内證を知  
る(二七ノ一九)

○たまの御聲を聞まじき爲に耳をふさぐ者のあらしよは更に御納受あ  
るべかず(二八ノ九)

傳道書

○何時も汝の衣裳を白くして頭に油を絶す事勿れ(九ノ八)

雅歌

○われ寝ても心は寝ず(五ノ二)

○曙の如く朗かに月の如くに美しく日の如くに撰ばれ揃へくる軍勢  
の如く恐しく見え給ふは誰ぞ(六ノ九)

智書

○さても果報拙き我等。眞の道には迷ひ御主の御光は我に輝かず惡  
逆の道に疲れ峻き道に羈され御主を知る事なしといふべし(五ノ六、七)  
○悪人の頼母しきは風の前のちり波に碎くるあは空に消行烟の如し  
(五ノ一五)

集會書

○たまを恐れ奉る者は其終りよかるべし。又其究めはべやとたるべし  
(二ノ一九)  
○たまにてんしやをせずんば人手には懸るべからずたまの御手にかゝる



べし(二ノ二二)

- 如何に子御主に歸り奉る事を今日より明日と延る事勿れ。其故は御臆り俄に來り給ひ御爵の時刻到來して汝を亡し給ふべし(五ノ八九)
- 汝が終を思ひ出せ。然らば永く科を犯す事有べからず(七ノ四〇)
- 汝が終りを思へ。然らば科を起す事あるべからず(同上)
- 病なき以前に藥を用意せよ(一八ノ二〇)
- 病をこらざる以前に藥を用ゆべし(同上)
- 酒と女は智者の心を奪ひ取る(一九ノ二)
- 人の衣裳と笑ふ事と行動の楚忽其身の證據となる者也(一九ノ二七)
- 愚者の口より金言をはくといふとも時に應じて言はざるが故に人よくきく事なし(二〇ノ二二)
- 誰か我口を守り我唇に印を押す者あるべきや。是即唇より覆され

わが舌我をいんへるのに落さざらんが爲也(二二ノ三三)

○若き時畜へずんば老て後何をか見付くべきぞ(二五ノ五)

○善人の知恵は日輪の如く變ずる事なし。惡人は月の如く時々替る(二七ノ一二)

○人を惡口し嘲る者は無果報たるべし。其故は無事に居るあまたの人を亂せば也(二八ノ一五)

○海を渡りたる人其難を語る(四三ノ二六)

以賽亞

○汝が物を捧るに手を廣げん時我汝より眼をそばむくべし。あらしよを重ぬるといふともきく事あるべからず(一ノ一五)

○我畑に爲すべき事を汝等に顯すべし。我彼四壁を崩すべければ人其を盗み其を踏付て荒地の如く爲すべし。枝をすかし耕すこともあ



るまじければ、荆からたち茂りあひて其上に雨もふるなと雲に下知すべし(五ノ五、六)

○以前の搦手を搦め返しせばめし者を随ゆべし(一四ノ二)

○御主の御山にをひて萬民に天のみき御かれいひを給はるべし(二五ノ六)

○嗚呼親より放ち捨られたる汝等哉。評議を爲すといへどもわが内證の筋目を以て爲さず、ゑじつとの加勢を乞ひ我に談合せずして\*はらわうの合力威勢を頼とし、ゑじつとの影に頼みをかくる者也。然に\*はらわうの威力ゑじつとの影の頼みは、汝が恥となるべき也。萬民に頼みをかけしといへども何の徳ともならず、合力をも受ざるが故に、恥を曝しける者也(三〇ノ一、二、三、五)

○ゑじつつとに行き多くの馬車を頼み其剛なる騎馬に頼みをかけしと

いへども、頼母しく思奉らず御主を尋ね奉らざる族は、淺間しき者哉。故を如何といふに、ゑじつつとは人也、頼に非ず。其馬は肉也、智惠の體に非ず。故に御主御手を延給ひて、彼合力を爲す者も又それを受る者共もともに倒れて案の外なる睨りを受べしと宣ふ也(三一ノ一、二、三)  
○如何に御主我一命は日の内に亡し給ふべし。我は燕の子の如く御身をよび奉る。鳩の如くうめくべし(三八ノ一三、一四)  
○我汝と共にあれば恐るゝ事勿れ。我は汝が頼なり、遠ざかる事勿れ。我汝に力をそへ強くなし汝を拘ゆべし。汝に對して戦ひたる者共を尋ぬるといふとも見付べからず。只なきが如くになり下り、降人となりて敵の足下に平伏たる者の如くたるべし。其故はわれ汝等が主頼也。汝の手をとりていふべし。恐るゝ事勿れわが力を添べし(四一ノ



○汝水中を渡らん時我と共にあるべし。水は汝を溺らかさず火に入ても焼べからず(四三ノ二)

○嗚呼汝らが掟を保ちたらんにをひては其無事大河の如くならん(四八ノ一八)

○御主を見付奉る事叶ふ時に尋ね奉れ。近く在ます時叫び奉れ(五五ノ六)

○御主萬方より寛ぎを興へ給ひ汝がみにまに光を充せ給ふべし。又汝流れある花園終る事なき泉の如くたるべし(五八ノ一一)

○如何に御主何とて我等ぜじゆんを仕るといへども照覽なきぞ。我等行體をなすといへども争か御擧用し給はざるぞ。汝等ぜじゆんをするといへども私の望みのまゝにし我掟に隨はず汝等より受負ひたる者を責せいたげて公事沙汰諍論をし他人に仇を爲す事等を止され

ば也。是わが内證に叶ふぜじゆんに非ず。只利倍の文書を破り貧人をせいたぐる重荷をおろし貧なる自由になしかけたる枷を遁し持たる一飯を半分わりて貧人に興へ旅人と貧なる者を汝が家に請ぜよ。是わが内證に叶ふぜじゆん也。汝是を勤めて用ある者に心を開き力をそへ飽滿させよ其時こそ然々の恩と思ふべけれ(五八ノ三―七)

○すま掟に頼みを懸奉る人の爲に調へ置玉ふほどの事は自にも見る事叶はず耳にも聞く事あたはず心にも及ばず(六四ノ四)

耶利米亞

○汝等我を恐れて震ひわなゝかずや。我は濱に眞砂をしきて海の涯を限り不易の法を定め白波は山を越るといふともわが定めをば越ゆべからず(五ノ二二)

○智者は智恵福人は實勇者は力に誇る事勿れ。もし誇らん事を望ま



ば我を知り我を辨へたる事に誇れ。ゆへを如何といふに萬吉の本は我なれば也。もし人公郷となるといふとも我を知る事と善徳備らずんば誇る事勿れ(九ノ二三、二四)

○如何に御主一切の人間の御主にて在ます御身を誰かは恐れ奉らざらんや。快樂萬徳の御主は御身にて在ませば(一〇ノ七)

○如何に御主御威勢深き御辭の御恐れわが心にみち／＼たるが故に人倫たえたる所に畏まりて只獨罷居る(一〇ノ七、一五ノ一七)

○御主より心を放し人に頼みをかけ弱き肉を腕とし命の守護とする者は果報拙き者也。其故は如此の人は野原におひたる芝の如く好事の來る事を見ず。只常に潤ひなくして生立事も叶はずしは、ゆく栖み難き地に栖べし(二七ノ五六)

○御主に頼みをかけ奉る人は御力を受べきに依て果報也。如此の人

は潤ひ近き河の邊りの樹木の如く日照の恐れもなく枝葉常に綠にして實ならずといふ事有べからず(一七ノ七八)

以西結

○汝が石の如くなる堅き心を退治し其代りとして新しく柔かなる心を與へ力をそゆべし。此新き心と其力を以て我掟を保ち善をつとむる様にすべし(一一ノ一九、二〇)

○我わが羊を尋ね見舞べし。ちり／＼になりたる羊をばすとるの尋ぬる如く我も又くもりて暗き日に在々所々より引集め國々より取納め本國へ引つれいすらゑるの山河國土のよき牧にて飼ふべし。又澤山なる草にて飼ふべし。是いすらゑるの國の高き山にをひての事なるべし。そこに縁なる草の上に寛げ澤山に草を飼ふべし。我わが羊を飼ひ寛ぎの眠を與ふべし。われ失せたる羊を取かへし離れたる



をば繋ぎ弱きをば強め強きを守りじゆいぞをもて飼ふべし(三四ノ一  
一―一六)

○我は其枷の鎖を截り非道の主人の手より遁したらん時皆人我を拵  
なりと見知るべし(三四ノ二七)

何西阿

○嗚呼不便なる者哉。我より遠ざかるが故に(七の一三)

○我そを離れたらん時は彼等が進退不便なるべし(九ノ一二)

亞麼士

○惡人の日中に日は暮れ白晝に大地は常闇となるべし。かれが悦び  
は愁へとなり終りはにがき日となるべし(九の一〇)

米迦

○裸にて啼き路頭にたつべし。大蛇の如く悲み叫び糸すつるちよと

いふ鳥の如く愁へを爲すべし。其故は彼がうけたる疵になほる道な  
く、殃に了簡なし(一ノ八、九)

○如何に人汝に善の極めと又御主望み給ふ事を教ゆべし。それとい  
ふは我身を糺す事慈悲を大切に思ふ事拵の御奉公に解怠なく才漢な  
るべき事是也(六ノ八)

撒加利亞

○今よりは我羊と巢立る事あるべからず。死なば死ね殺さば殺せ其  
余は互ひにかみ合ひて亡びば亡びよ(一一ノ九)

馬拉基

○我汝が親なるに親に當る敬ひは何處にあるぞ我汝が主なるに主に  
當る恐れは何處にあるぞ(一ノ六)

○我に歸れ。然らば善惡人の差別と又われに仕ふる者仕へざる者の



隔を見知るべし(三ノ一八)

新約全書

馬<sup>マ</sup>瓊<sup>ジュ</sup>傳

- さんたまりやノリ御誕生なさるべき若君は一切人間を諸惡より遁し給ふべき御主にて在ませば<sup>マ</sup>とよび給ふべし(一ノ二一)
- よき實のならざる樹は切りて火にくべらるべし(三ノ一〇)
- 汝等が光を人の前に輝せ。其善作を見て天に在ます汝等が御親を貴み奉るべき爲に(五ノ一六)
- 如何に兄弟天地を初めとして何れの御作の物にかけても虚き誓文をする事勿れ。只汝の辭いやとあふとの二ツの外に答ふる事勿れ。是罪の落着に逢まじき爲に(五ノ三四)

- 右にて爲す慈悲を左に知らずる事勿れ(六ノ三)
- 誰も二人の君に仕ふる事叶はず。寶を主人とし貪欲に身を渡して又御主<sup>マ</sup>を思ひ奉る事叶はず(六ノ二四)
- 人を糺す事勿れ然らば糺さるべからず。決着する事勿れ然らば決着せらるべからず(七ノ二)
- 空をかける鳥類種を蒔きうへかへる事もなく以後の蓄へもなしといへども天に在ます汝等の御親よりそれをはごくみ給ふ也。汝等鳥類には勝らずや…何を食し何を飲んと心を盡す事勿れ。是<sup>マ</sup>を知らざるぜんちよの業也。汝等は先<sup>マ</sup>の御國と其憲法を尋ねよ。余は添へて與へ給ふべし(六ノ二六三四)
- 天の國は隠れたる寶に等し(一三ノ四四)
- 縦人四海の政を掌に握るともあにまを失ふ仇を求ば何の益かある



べき(一六ノ二六)

○世界を遍く掌に握るといふ共、あにまを失ふにをひては何の益ぞ(一六ノ二六)

○如何に果報拙き奴原かな。惡のあんじよと天狗の爲に調へおきたる終りなき火焰に落よ(二五ノ四一)

○番してゐるを主人に見付らるべき臣下は果報也(二四ノ四六)

馬可傳

○誠に汝にいふ。我教に對して親兄弟所知財寶田宅以下を捨る者は現在にても百相倍を請取、後生は永き一命に至らずと云者一人も有べからず(一〇ノ二九、三〇)

○現在にをひて百相倍を請取、未來には終なき命を得べし(一〇ノ二九) 路可傳

○天狗の隨ふとて悦ぶ事勿れ。只汝等の名を天に記されたる事を悦ぶ(一〇ノ二〇)

○色身を殺すより外別の力を持たざる人を恐るゝ事勿れ。只色身とあにまの死するとなるいんへるのに落さるべき御力の源を恐れ奉れ(二二ノ四五)

○頭の毛一筋をも失ふ事有べからず(二一ノ八)

○是をせんたびごとに我を思ひ出す爲にせよ(二二ノ一九)

○如何にせるされんの女人、我を啼事勿れ、只汝等と子孫の上をなけ。其故は胎内に子を胎まざる女と、子を巢立ぬ乳房は果報なりといふべき時日來るべし。其時は大山に向て我上に崩れ懸れといふべし。又岡に向つて我を埋めといふべし。其故は青みたる樹さへ如此なれば、枯れたる木は如何に(二三ノ二八、二九、三〇、三一)



約翰傳

○我與ふべき水を飲む者は再び咽渴く事あるべからず(四ノ一三)

○我が奉公に届き我辭を保たば望みて乞ふべきほどの事を叶ゆべし

(二五ノ七)

○我地よりあげらるゝにをひては萬事を我に引よすべし(一二ノ三二)

○御親の導きなくして誰も我に来るといふ事なし(六ノ四四)

○我等は\*あばらんの子孫也未人に仕ふる事なければ争か自由にな

るべきとは宜ふぞと。御主答給はく真に汝等にいふ。罪を犯す者そ

れ則科の奴也。子はいつまでも家に留り奴はいつまでも留まる事な

し。故に拵の御子汝をとき赦し給はゞ真に自由の身となるべし(八ノ

三三―三六)

○我はよきばすとる也。わが羊を見知り羊も又我を見知る(一〇ノ一

四一五)

○我を大切に思ふ者はわが掟を保つべし。又御親よりそれを御大切に思召し我とともに其に來り給ふべし(一四ノ二三)

羅馬書

○拵御柔和の御上より汝をべにてんしやの道に召出し給ふといふ事を知らずや。然るに汝は尙難面くべにてんしやに心ををこさず我と身に背きて御糺明の日の御瞋りを畜ふるもの也。拵面々の所作に應じて御返報なさるべし(二ノ四―六)

○我等が古き人ははやいととともにくるすに懸りたり(六ノ六)

○嗚呼果報拙き我哉。此死するの色身より誰か我を遁すべきまじの御功力より受奉る拵の御がらさを以て(七ノ二四)

○拵を大切に存ずる人は萬事を善になす(八ノ二八)



- 誰か我等を<sup>きしと</sup>の御大切より遠ざからする事叶ふべきや。但飢渴貧苦災劍難の辛苦を以ても何ぞさくる事叶はんや。誠に諸のあんじよの力も死する難儀も天も地もいんへるのも其外諸の御作の物の力にても全く<sup>まじ</sup>の御大切をさくる事叶ふべからず八ノ三五三八三九)
- 難儀には堪忍し頼母しきを以て悦べ(一二ノ一二)
- 力の及ぶほど我方より萬民を無事あるやうにせよ(一二ノ一八)
- 汝等頼敷を以て悦べ。辛勞の時は堪忍をもて(一二ノ一二)
- 敵に恩を與ふる事は大切の火を燃さんが爲に頭に煥をつむ(一二ノ二〇)
- <sup>まじ</sup>の御口は飲食に非ず憲法と無事とすびりつさんとの御悦び也(四ノ一七)

哥林多前書後書

○受ずして何を持つや。受たるにをひては何ぞうけざるが如くに驕るぞ(前四ノ七)

○生死世界現在未來共に以て皆汝等が者也。其故は悉く汝等が扶かりの便りとなれば也(前三ノ二)

○善惡の御糺明として各<sup>きしと</sup>の御前に罷出べし(後五ノ一〇)

加拉太書

○人の氣にあはん事を専らとするにをひては<sup>きしと</sup>の御臣下にてはあるべからず(一ノ一〇)

○わが生ける事はわが一命にあらず<sup>きしと</sup>われにいき給ふ(二ノ二〇)

○骨肉はあにまに敵對ひあにまは色體に敵對ふが故に互に一味する事なし(五ノ一七)

○世界の譽を望み互にねたみ嫌ふ事勿れ(五ノ二六)



○互に重荷を持にをひては御主きりごとの御掟を達す(六ノ二)  
以み非せ所書

○汝等の口より悪き辭をはく事勿れ。只きく人の徳となるべきよき  
事をのみいふべし(四ノ二九)

○我等が立る所の道にをひて似合たる色好みの物語り又は狂言綺語  
をいふ事勿れ(五ノ三四)

○酒に淫亂あり是に酔ふ事勿れ(五ノ一八)

提摩太前後書

○すを敬ひ奉る事は萬事の徳となる也。其故は現在未來の御約束皆  
以て是に對し給ふ也(前四ノ八)

○勇健に戦はざる者は利運の冠を得る事あるべからず(後二ノ五)

希伯來書

○すの御辭はつよくいきやかなり(四ノ一二)

○すの御手に懸り奉るより外又恐しき事なし(一〇ノ三一)

○如何に兄弟す御親の如く折檻し給ひ教へ給ふ時は其道を以て汝等  
を子の如くし給ふと存じ勇みを以て堪ゆべし。如何なる子か親の折  
檻をうけざる事あらんや。すの御子達のうけとをり給ふ御折檻を汝  
うけ奉らぬにをひてはすの御子にてはなし。別の親の子といふ證據  
也。我等が色身の親より折檻したる事を思ひ出せ。それをさへ敬ひ  
孝行を盡したる者也。然る時はあにまの眞の御親にて在ますすより  
與へ給ふ御折檻を不退の命を保つ爲に争かうけまじきと思ふぞ(二  
ノ七八九)

彼得前書

○善に極まりたる人さへ漸う扶かるべきに惡人は如何あらんや(四ノ



一八)

○おぼは謙る人にならさを與へ給ひ、たか慢なる者には敵對給ふ(五ノ五)

約翰第一書

○如何に大切の兄弟、こんしゑんしやの咎めなきにをひては、我等が乞ひ奉るほどの事をおぼ與へ給ふべしと頼敷を持べし。其故は御掟を保ち天に叶ふほどの事を爲せば也(三ノ二一、二二)

約翰黙示録

○女人の中に交り其身を汚さず、一生不犯の位に届き給ふ人々は、常に御主きりしとの御跡を慕ひ給ふ者也(一四ノ四)

○御主の御内證に相叶ひ死する者は果報也(一四ノ一三)

○我は萬事の初と終り也。咽かはく者に命の水を與へ無縁に飲すべし(二一ノ六)

附 録



## 第一 吉利支丹文學字集

### 凡例

- 一 こゝに輯録する所は、概ねぎやとべかどる第二卷末の字集を本とし、是を同第一卷卷末集字によりて、而して又他の吉利支丹文學の字彙及び本文をも参考して、補つたものである。
- 二 集字の分類、體裁、また振假字等大概原書により多少の修正を試みた。
- 三 原書の分類方法について最も注意すべきは、本來行、草書の字體を標準として、必ずしも楷書の字劃によれるものでないことである。こゝに楷書に書改むるについて、多少の苦心を加へざるを得なかつたが、なほ例へば、最字の山のうちに入れる、執字の才のうちに入れる、手偏と木偏との混入せる如き、いづれももとの體裁を保存せるものである。



○ 日ひへんへん 時とき星ほし普ふ皆みな替か味あじ暖ぬる暗く會あ書か春はる曜あかり量りやう香か著しやく曇とむ舊ふる晚ゆふ曝あび明あきらき

曉あけ日本にっぽん日域にちいき日輪にちりん日數にちすう明日あす明白めいはく暗闇あんあん明智めいし書置かき置き明星めいせい時日じつち智ち

分ぶん明珠めいしゆ時とき剋こく明鏡めいけい書籍しゆせき舊惡きうあく智ち惠ゑ智ち者しや智ち眼がん眼がん乞き智ち德とく皆具みなぐい

○ 月つきへんへん脇わき膝ひざ有あ背せ期き膳ぜん脫だつ暇ひま膚かわ朗らう腕うで腸ちやう胎た脚あし胸むね腦なう肥あ腹はら

膝ひざ嘲あざける骨ほね肩かた脇わき立たち肝かん要よう肝かん文ぶん有あ情じやう非情ひじやう胎たい内ない月げつ卿けい雲うん客かく肝かん膽たん膝ひざ味あじ

臆おそ病びやう脾ひ胃い勝せう利り臟ざう腑ふ背せ負ひ暇ひま乞き朝あ恩おん骨こつ肉にく骨こつ髓ずい有あ様さま朝あ榮えい落らく

○ 人ひとへんへん位ゐ倍ばい倩せん休きゆう信しん仇きゆう備び作さく依い仕し似に似に僻へき何なに働はたら例れい付つ偏へん傳でん僅げん

休きゆう傍ぼう使し催さい債さい價げん代だい保ほ伴ばん俄ゑ但た倒たう健けん伏ふく件けん役やく僞ゑい修しゆう依い估こ傍ぼう

若じやく值ち遇ぐ人じん倫りん假げ相さう仁じん義ぎ信しん力りき人じん間けん氣き信しん仰やう信しん心しん催さい促そく人じん民みん人じん跡せき作さく

業げう信しん用よう休きゆう息そく僧そう官くわん似に合あひ假かり染せん偏へん執しやく供く恭きやう假かり令れい他た犯はん偷ちゆう盜たう假かり屋や作さく者しや

何時なんとき俸ほう祿ろく傍ぼう若じやく無む人じん僻へき事じ偏へん頗ら人じん家か人じん倫りん修しゆう行ぎやう

○ 女にょへんへん好この安やん嫌けん妻さい媚めい妨たふ妄わう妾せつ嫉しやく媒ばい奴にょ妙めう姪し始し好かう事じ嫡てつ子し

奴にょ原げん姬ぎ宮みやう妙めう藥やく妻さい女にょ安あん樂らく始し終しゆう好かう色しやく安あん閑かん妄わう執しやく安あん住じゆう嫁か娶しゆう嫉しやく妬と好かう

惡あく安あん穩ゑん女にょ御ご更かう衣い好かう便べん妄わう念ねん安あん泰たい女にょ體たい要よう文ぶん

○ 目めへんへん眠ねむ眼がん省かう省かう眸めう盲もう瞋しん睫せつ眉まゆ昵ねい盲もう目め眷けん屬じやく睡すい眠めん看かん經きん目め宛あて

目録もくろく目め前ぜん

○ 耳みみへんへん聲こゑ聊しやく取と聲こゑ聊しやく耽たん

○ 口くちへんへん只ただ吾われ善ぜん答たふ号かう名な唯ただ叶か喻よ喜き品ひん味あじ呼よ喚わん器き告こ咽えんのどのど噴ふん

咄はく吠はい嘲あざける嘲あざける哂あはれる唱なう營えい谷こ尚なほ否いな啼な嗜しやく后ご鳴な君きみ舌した若もし唇くちびる善ぜん德とく善ぜん緣げん

善ぜん緣げん心しん願げん善ぜん行ぎやう善ぜん念ねん善ぜん作さく善ぜん根こん名な譽よ名な利り名な家け吉きち祥しやう吉きち事じ口くち舌せつ口くち







○土 土 壘 基 增 堅 場 墓 壤 境 堆 埃 境界 地盤 地水 風  
火 垢 膩 城 裡 堅 固 地 震 墨 筆

○水 水 法 波 源 流 深 淺 染 慕 治 汚 海 永 忝 漏 汝 溺 潤 濱  
消 湊 汗 求 淵 活 涯 泉 添 演 淚 汲 注 漂 洒 洗 臨 滴 泥 濁 淫 渴 瀨  
沸 混 滯 漁 滑 湯 沈 潔 凝 漸 滑 清 淨 滿 足 滿 作 江 何 法 會  
法 界 法 度 永 劫 不 退 永 代 漫 々 沈 磨 泣 啼 焦 往 昔 水 上 水 主 深 山

深 重 沙 門 沙 汰 沾 却 澤 山 浮 世 河 邊 河 上 酒 宴 酒 飯 洪 水 渡 世 淵  
底 泥 土 池 水 海 陸 海 上 淺 間 敷 活 計 油 斷 渴 仰 治 手 洗 濯 淫 亂 濁

世 洋 沖 浮 沈 淫 欲 潤 澤 消 果 消 安 流 人 治 術 海 路 深 旨 法 式

○火 火 燃 燈 然 照 災 燠 熱 焰 燒 燥 煙 熱 氣 火 焰 火 粉

火 氣 火 宅 黑 雲 災 難 照 覽 熊 手 無 果 報 無 力 無 道 無 性 無 事 安 穩

無 所 作 無 邊 無 緣 無 言 無 盡 無 常 無 價 無 量 無 量 無 盡 無 足 無 益

無 際 無 心 燒 鐵 燃 立 焙 籠 炎 天

○木 木 梓 末 樂 案 巢 極 根 果 集 梢 棺 榮 林 札 枕 朽 禁 末 楫  
杖 鬱 柿 柳 本 抑 樹 下 石 上 樹 木 條 々 未 來 記 未 來 未 明 禁 好

物 森 羅 萬 像 柔 和 枝 葉 榮 花 榮 曜 極 寒 極 熱 權 門 根 本 樓 閣 樓 內  
枯 果 末 孫 末 葉 檜 械 楯 鉾 木 陰 相 應 相 手 鬱 憤 柔 軟 椎 夫 禁 獄 楫

取 楚 忽 根 元 植 置 木 像 相 當 案 塔 校 合 極 意

○石 石 破 礎 碎 磬 石 金 破 滅 破 損 破 石 破 壞 石 瓦

○玉 玉 理 現 現 在 現 世 現 當 二 世 瑤 珞 珠 玉 瑞 喜 瑕



瑾。珍物。玉體。玉顏。瑞相。玉莖。

○金 金。鏤。欽。鏡。鑑。鎖。錦。鉞。針。鐵。鐵。鑊。鐵。釘。劍。釣。鎚。釘。金。

銀銅鐵。金言鐵針。鐵石。金銀。錦綉。鐵釘。

○刀 刀。初。則。切。剩。削。判。剛。契。制。利。那。功。能。剛。強。初。參。刑。

罰。到。來。制。禁。剃。刀。功。者。劍。難。

○限。隨。隱。防。障。陶。既。除。隣。墮。墜。陣。陽。氣。隱。家。障。碍。墮。

落。墮。獄。陣。頭。降。伏。降。人。降。參。隣。短。

○田 田。當。畜。番。異。壘。畧。異。儀。異。見。異。香。畜。類。田。宅。田。

地。田。畠。田。夫。野。人。町。辻。當。今。當。門。

○禾。和。利。程。移。稀。科。委。積。稱。耕。物。秤。穢。種。稠。和。合。和。與。

利。口。利。益。利。德。利。劍。利。運。利。養。利。他。化。道。稱。名。私。宅。秘。密。種。々。秤。目。科。送。

○食 食。飽。飲。餘。餌。飾。養。喰。飢。饑。飽。滿。頓。死。燒。亡。飽。食。飲。食。打。眠。餘。慶。餓。死。飢。渴。飯。臺。餘。所。余。善。餌。食。食。後。余。年。飽。足。

食堂

○衣 衣。裸。衰。哀。憐。哀。情。衣。裳。衣。食。衣。冠。褒。美。衣。類。襖。褐。

○巾 巾。希。帝。帶。布。却。帝。王。市場。

○糸 糸。紙。紵。終。給。納。緩。經。縱。繩。繼。緊。累。纏。繼。續。繫。

縛。纜。網。綱。結。絕。經。中。經。文。經。典。約。束。綾。錦。繁。昌。絕。間。絕。果。糸。竹。

終。夜。平。仗。結。構。結。句。繪。像。木。像。繪。圖。繪。師。納。受。納。得。繼。母。縫。物。



糺明○糺決○累德○綸旨○綸言○緩怠○紅粉○絶入○紅顔○綺語○約諾○終夜○

○犬○猶○獨○獸○猪○犯○厭○臭○獵○狼○猛○惡○猛○火○狼○籍○獅子

王○狩○人○執○着○執○行○獨○身○獨○居○獄○卒○狗○兄○狂○亂○狂○言○綺○語○執○心○獵○漁

○馬○駿○馴○驚○騷○駒○驕○罵○詈○誹○謗○驕○慢○騎○馬○馳○廻

○佳○難○離○難○行○難○艱○難○儀○難○渡○難○路○難○所○難○海○難○面○

雜木○雅意○雜談

○酉○酢○配○醉○酬○配○當○醉○臥○配○所○醫○師○醫○者○醫○道

○虫○蟻○虫○蜜○蟻○蜂○蟻○虫○螻○蚊○蠅○蠅○燭

○頁○頼○願○願○顯○頭○顔○傾○額○預○煩○頂○願○頻○頼○母○敷○

頼敷○頂戴○顔色○顯然○領掌○順風○煩惱

○貝○則○賜○賢○費○貧○負○買○責○賤○賞○質○財○寶○質○物○質○形○

賞○翫○貧○窮○下○賤○賞○罰○賤○女○賢○慮○最○肩○責○手○貧○賤○負○物○

○欠○歎○歡○敵○欺○歡○喜○歡○喜○自○在○歡○樂○歌○曲○歌○舞○音○樂○敵

對○敵○國

○子○子○學○字○殘○殞○孛○厚○學○匠○學○者○學○文○學○德○學○校○

子○細○子○孫○々○子○孫○乳○房○孝○行○存○生○殘○黨○學○智○乳○味○孔○雀○孤○貧

○示○示○祈○禮○補○祥○禍○祝○應○福○德○福○有○被○官○祈○禱○禮○拜○福

人○祝○儀○初○發○心○神○變

○彳○彼○懲○德○後○行○徹○待○役○街○征○罰○後○生○後○代○後○悔○



